

野村実著作集 上巻

信仰と人生

シュワイツァーと共に

野村実著作集刊行会

目次

まえがき

信仰と人生

1 反省	11
2 信仰生活の危機	16
3 死ぬ心構え	22
4 医療と伝道は両立する	24
5 人間とは何か	27
6 実と影	30
7 矢内原先生と私	43
8 宗教心と信仰心	46
9 人と愛	49
10 医療と宗教	56
11 私と人生	60
12 私の教会・私の先生	62
13 人間疎外をいやすもの	63
14 生きがいについて	71
15 きびしい役割	87
16 生きる	91
17 生くるは主のため	97
18 差別するもの、されるもの	113
19 十字架による贖罪	121
20 絶望	127
21 ころをいやす	136
22 王と農夫	145
23 私の信仰履歴書	150
24 内村先生と神秘主義	171
25 近づき難かった山本泰次郎さん	181
26 星野香澄君を弔う	182
27 死の尊厳	185

28	ひとりの友として	187
29	新しい世界	189
30	まことの礼拝とは	191
31	姦淫の女の話	193
32	ナルドの香油とヨハネの前半の結び	195
33	「土の器」三題	196
34	老いの受容	199
35	私の復活信仰	200
36	世の終わるときにはどんな徴があるのですか	202
シュワイツァーと共に		
37	現代最大のヒューマニスト	209
38	大戦中のシュワイツァー	217
39	シュワイツァーの故郷を訪ねて	223
40	シュワイツァー博士と共に	226
41	花咲くアルザスにて	239
42	バッハを楽しむシュワイツァー	248
43	シュワイツァーのために弁ず	254
44	シュワイツァーと日本	257
45	内村先生とシュワイツァー	260
46	医師と倫理—シュワイツァーの場合	270
47	シュワイツァーに学ぶ	283
48	ひとりで歩いたシュワイツァー	293
49	シュワイツァーの説教	297
50	シュワイツァーの思い出	303
51	おとなになることをきらったおとな	337
52	シュワイツァーと平和	348
53	シュワイツァーと社会福祉	356
54	シュワイツァーの信仰	361
55	内村先生とアルベルト・シュワイツァー	369
56	私のシュワイツァー遍歴時代	372
	初出一覧	939
	略年譜	395
	野村実先生の歩み・信仰・人間	野上寛次 398

野村実著作集 下巻

医療と福祉

野村実著作集刊行会

目次

I 診療の眼	
人間医学	8
病む友へ	11
医療の本質は何か	17
病院スピリットの危機	24
医療の公共性と社会性	30
結核のロゴセラピー	40
患者さんの意思について	50
病人のなおしかた	63
長期療養者のB・T	79
心臓移植と「私」	89
科学者としての医師の倫理	91
医療のこころ	97
リハビリテーションのこころ	100
患者と医者	108
誤診	125
人間を診る	127
安楽死運動には反対	129
II 医療ソーシャルケースワーク	
医療の社会的責任	134
医療の変遷とソーシャルケースワークの必要性	143
医療ソーシャルケースワークとは	153
ケースワークの壁	163
五人の巨人	167
貧困の心理	169
平等とは何か	173
III 障害をもった人々と	
福祉	178
政治家の貧困	180

新年所感	181
チャリティと福祉	183
今後の身障者社会福祉のあり方	184
東京コロニーの社会的役割と意義	185
国際障害者年第二年	187
東京コロニー部内報より	189
IV 老いの時	
老いと死	244
老人の生きがい	247
私の老後	249
老いの豊かさ (その一、その二、その三)	252、254、256
老いとは何か	258
老いの使命	262
老いの受容	265
カール・ヒルテイの「老年について」を読む	267
老いの目的	269
老いには初めなく終わりなし	271
寿命革命にこたえるもの	276
最後のひとりの生存権	278
ホスピスと安楽死	280
V 国際医療協力	
日本キリスト教海外医療協力会発足	284
JOC Sの基本理念	286
医療と伝道の原点	292
JOC Sの現在の諸問題	293
VI 沖縄	
沖縄医療の混迷の底にあるもの	300
福祉と沖縄	308
反戦デーに思う	312
VII BOOKS	
神谷美恵子著『人間をみつめて』	314
川喜田愛郎著『生命・医学・信仰』	315
P・L・エントラルゴ著・榎本稔訳『医者と患者』	317

『折の友召天記』第一集318

VIII 院長日誌

院長日誌一九五二—六七323

初出一覧427

医療と福祉の歩み・野村先生とともに中川晶輝.....489

Ⅲ 障害をもった人びとと（下巻 178 頁～242 頁抜粋）

福祉

1 私と福祉

私は結核医として働いた長い経験のなかで、患者の福祉と絶えず直面せざるをえなかった。その一つは、結核病による死亡数が国民死亡順位の第一位を十年以上も続け、結核を亡国病といった頃のこと、患者の多くは死を予期していた。しかし、まだ若かった私は死という人生の究極の問題を、それらの患者を前に答える自信はなく、いつも避けていた。

もう一つは、患者の入院希望が増えて病床が不足し、全治に至らない患者を止むなくトコロテン式に退院させたころのこと、住居も職場もえられない回復途上者は互いに助けあい集団生活(コロニー)を営み、辛うじて生きていた。やがて所得倍増の好機を迎えるに至り、社会福祉事業という名目のもとに、「身体障害者授産施設」がととのい、結核回復者にも身障者とともに、援護、育成、更生の道が開かれた。私はそのなかのいくつかの施設に役員として長く関係しているが、職員の懸命な努力にもかかわらず、施設利用者の真の福祉への道は未だに遠いと言わざるを得ない。

2 福祉の思想

福祉という言葉が、わが国で用いられたのは第二次大戦以後であるが、未だにその真意は納得されていない。そこには「戦前と戦後とを画然と区切らせるほどの特色を蔵している」(注1)とまで言われている。新しい日本国憲法は人権や信仰の自由などを明らかにしたが、個人の福祉については「公共の福祉に反しない限り」と断るに留まり、何を福祉というか明言していない。

私が関係してきた施設も、キリスト教信仰に立って創立され、すでに四十年に近い歳月をへてきたが、法による公共施設であるため信仰に関しては「基督教精神に基き」というわずか八字を定款の冒頭に記すに留まり、その解釈や運用については一言一句も触れえないでいる。しかし監督官庁の指導官はこのわずか八字をさえしばしば除けという。かれらは立場上言ってみるらしいが、理事者らはこれだけは決して除けないと言いながら、何をどうすべきかの具体策は一向にまだ進まない。

施設利用者が社会復帰するための職能の向上や、就職、住居の斡旋などは、職員が常に努力するところであるが、これをもって福祉への道は尽くされていると言えるであろうか。私には「あなたには足りないことが一つある」(マルコ 10・21)と言ったイエスのきびしい言葉が聞こえてくる。その欠けたひとつを私らは何によって利用者に伝えうるのか。たとえ集会、説教、おおやけの祈祷などを敢えて行うとしても、そのたぐいは逆効果をとときには生ずると聞く。真の福祉はいかなるもの、また、いかにして人から人へ伝えうるのか。重い課題である。

(注1) 糸賀一雄『福祉の思想』NHK ブックス 1968年 65頁

3 リハビリテーション

これは第一次大戦以来の新語であるが、今は「病院へリハに行く」などと誰の口にものぼり、一般に機能回復、社会復帰の意味に理解されている。しかし語源をラテン語の *habil* までさかのぼると、これは持つという他動詞であると同時に、熟練し器用になるなどの目標を含んでいる。ある方向へむかつて心を定め、おのが残存能力を引出し、あるべき人権を回復しようとする努力を考えると、自動詞とも言える。例えば英語の *heal*、ドイツ語の *heilen* が、癒やす、癒えると他動詞と自動詞両様に用いられる如くである。自動と他動の同時性、主体と客体の一体性は心というものの分かち難い実態を語っている。

リハビリテーションは医療の場合に似て、待っていれば与えられるものでなく、同時に主体が自ら求めてこそ与えられる。リハビリテーションが人間性復権ともいわれるわけはここにある。福祉もリハ同様に、棚からぼた餅のように落ちては来ない。

4 自立

リハビリテーションは自立をたてまえとする。その自立は文字通り自分の力で立ち上がり、他からの助けを借りないことであるが、必要ならば法律による援護や、自助具、車椅子などを用いる手段も利用できる。しかし、人間は社会的、経済的に独立しえたとしても、その人独自の、他からの支配を受けないとする権利の主張があり、それあつての人間である。それは指紋のように、その人独自のものであり、その故に何人も他の人によって代わることが出来ない存在であり、個々に尊重さるべきであり、人間性復権の真の意味である。それなしには、たとひ衣食住の道をうるも、自立と言えないのである。

人は衣食足って礼節を知ると言って生活の保証を求めるが、人は持つことが多いほど人間性は疎外される。福祉は肝心な人間性を欠きやすい。

5 むすび

福祉と福音とは似て非なるものでないか。福祉は公的扶助による生活の安定を求める人に社会主義国家(注2)によって与えられる。福音はイエス・キリストを主と仰ぎ、その前にひたすらおのれを空しくして祈るものに与えられるイエスのことばに尽きる。私は両者を結ぶ確かな橋を見出したいと切に願う。(1994年)

(注2)ここでいう「社会主義国家」はマルクス主義的な概念ではない。社会政策として公的扶助による生活の安定を国民に与えることを目指す国家の意味である。

政治家の貧困

全国の皆さん、新年おめでとうございます。ことしも大いに頑張りましょう。

さて、旧年もおしつまった12月15日に、公私病院連盟の医療費緊急是正促進大会なるものがありました。

どこの病院の経済事情も最近とみに悪化していることは周知の事実です。それだから、右の連盟は会員1600余から、395の病院に依頼して、詳細な実態調査を行ったのです。その費用が二千万かかり、5カ月を費してもまだ完成していないことからその規模の大きさを想像できるでしょう。その調査の中間報告に基づいて、結論として15.5%の引上げを要求したのです。

私はたまたまその日、陳情団に選ばれたので請願隊とは別に、衆院各党や厚生省などに陳情に行き、病院の実態から緊急引上げを要する事情をつぶさに説明したのですが、私は、その際国会議員の大部分は具体的事象にまるで暗いという印象を、つけたことを偽るわけにいきませんでした。

新聞やラジオで議員の談話や演説などをきくと、実に何でも知つての上のようにきこえますが、政治的かけひきに憂き身をやってこそいても、実情の正確な知識の上に立って事をすすめる方は、案外少ないのだときめつけたくなりました。こんなことはいまさらいうのも野暮かもしれません。

医療のことは福祉国家を標榜する以上、国の体面にかけても大事なはずですが、結核問題ひとつをとっても、遅々として進まないではありませんか。内科疾患を身障法に繰り入れる問題など、ほとんどの政治家はそのイロハさえ知らないと思像してあやまりではありません。

世間ではよく政治の貧困ということをいいます。それはしかし、元をただせば政治家の中身、すなわち勉強も思想も愛情も貧困だということです。莫大な費用と時間をかけて、政治がからまわりし、われらの努力も空転させられているのです。

政治家のための政治はもう沢山です。なんとかして、真に社会のためをおもう政治家、出でよ、と言いたい。

結核回復者コロニーの問題を政治家が真剣にとりあげるのはいつのことか。そう思うと悲観的ですが、目標にむかつて、ことしも頑張らねばならないと思います。

(1967年)

新年所感

「歴史はくりかえす」という。

はたしてそうだろうか。松飾りや晴衣、新しいこよみをめくる年頭は誰にもすがすがしい。ことしこそはと力むのは当然である。それが、5日たち、10日たち、2月、3月を迎えると、いつのまにか新鮮味はどこかに失せて、年々歳々、同じことを繰り返しているような錯覚におちいる。これもあたりまえである。新聞やラジオは毎朝、毎晩、ニュースを伝えてくれる。たしかにニュースというだ

けのことはあるが、交通事故と人ごろしと政界の腐敗と死亡広告と…同じことのくりかえしのような気がする。

「新しい酒はあたらしい革袋に」という古い言葉がある。日本語もヨーロッパ語も、新しいとかニュースとかにはひとつ話しかないけれど、上に記した「新しい酒」と「新しい革袋」とはもとの言葉では異なる。「革袋」の方のあたらしいは「いまだかつてなかった」という意味である。

歴史は繰り返すというけれど、新年は実に「いまだかつてなかった年」、地球上の誰もが、いや宇宙の歴史がはじまってからいままで人類が経験したことの無いはずの年なのである。一日一日だってそうだ。

私は日本語の新年をそういう気持で味わいなおしたいと思う。

全国コロニーの短い歴史をふりかえってもそうだろう。去年は熊本コロニー二十周年祝典があった。見ようによっては、どこにもあることだ。盛大だった、有意義だった、続く総会もかつてない多数の同志の熱心な集まりだった、とわれわれは感激したが、世界のニュースにのったわけではない。

私はそれでいいと思う。新聞にのることもいいが、それは別のことで確実な歩みをたゆむことなく続けてきたという事実が、まさしく大事件なのである。日本語のあたらしさはよしなかったとしても、確実な進歩が時のきざみのなかに、かつてなかったものとして積み重ねられていく。

私は熊本コロニーの祝典を去年の代表的事件としてとりあげたが、私は熊本だけのことを言っているのではない。われわれの眼はとにかく大きいものに注がれ易いが、見えないこと、記憶に残らないこと、かならずしも意味のないことではない。全国各施設、またひとりひとりのメンバーが最善の努力をした事実は事実である。成功も事実なら失敗も事実である。それらが積み重ねられて全コロの歴史はでき上がっていく。それは決して繰り返しではなくて、いまだかつてなかったものを築いているのである。

目にみえた成果がないという人は大きなものしか見えない眼のもち主である。さあ！ ことしもいまだかつてなかった一日を真剣に生きて365日を積みあげようではないか。新年は元旦の、正月だけの新年ではない。来る大晦日まで新年であってほしい。

(1970年)

チャリティと福祉

過日、白十字ホームのための募金公演をいろいろの方々のご好意で催すことができました。おかげで別記のように思いがけない多額のご寄付を頂き、私は心から感謝しています。

そのさい、ご案内のプログラムに「チャリティの集い」とありまして、以来私の胸にはチャリティ、慈善、施し、福祉などという言葉のイメージが妙にこんがらがって、モヤモヤしたものが消えませんでした。

そのわけは、私が日頃「福祉」を考えるときに、福祉は上から下へほどこすという意味のチャリティや慈善とはまったく違うと主張していたからでした。戦前のチャリティや慈善という言葉には不幸

なものに恵んでやる、上から下へという気持が多分にありました。明治初年にできた恤救(ジユツキユウ)規則はぞっとするようにひどい救貧法でしたが、昭和7年にこれに代ってできた生活救護法でもその精神に変わりはありませんでした。いな、戦後改められた生活保護法にしても、その他の社会福祉法にさえ、その臭いが残っています。福祉国家を看板にして威張ってみても経済優先で、大企業を護るために国民の不满を押えるものと解釈されても致し方ないのです。もっとも、老人福祉法だけは「敬愛」という言葉を使っているだけましです。

つまり、日本では戦後に福祉と言いかえてみても、上から下への気分が消えません。その証拠には、それらの法の援護を受ける側にもある卑屈な気持さえ残っています。私たちは福祉は基本的人権思相心から出発し、人間の平等、社会的責任、人間の権利と考えるべきことを主張しているのです、どうもチャリティや慈善という文字にある反発を感じてしまうのでした。

私はこうした胸のわだかまりを拭うために、私がいやらしいと感じていた言葉の出所を調べてみました。それを詳しくここに記す余白がありませんが、要するに、チャリティや慈善、施し、いずれも純真な愛のこころ、その行為を意味し、言葉には何の罪もないことを私は知りました。

人間には、たとえば、らいを天刑病といったように、貧乏、病気、障害、不幸などを前世のたたりとか、その人の罪の罰と結びつけてさげすむ考えがあります。そこから不幸に同情する愛の行為に上から下へという観念がいつのまにか、かびのようにこびりついたのではないのでしょうか。

今後私はチャリティや慈善に着せた濡れ衣を除き、私の不明を謝罪せねばなりません。改むべきは私たち人間のこころであって言葉を非難するに及ばないことを、私は主張しようと思います。

チャリティの集いに寄せられた多くの方々のご好意に改めてお礼を申しあげたいと存じます。
(1978年)

今後の身障者社会福祉のあり方

国際障害者年を前にして、日本の身障施策を反省し、今後の努力の目標を考えることは意義深いと思います。

現行身障福祉法は昭和25年から施行されました。それ以前、身障者に対して法的には何ら考慮されていなかったことを思うと、これは格段の進歩で、内容も先進国に対し、ひけをとらないと言えましょう。しかしその後三十年がすぎ社会情勢も変わったので、改めるべきことはないか、いま検討が始まっています。

日本は外国の文物、制度を取り入れるすぐれた能力をもっています。明治維新の文明開化ぶりをみても領けます。しかし、惜しいかな、何事も形をまねるに急で、それを生み出した精神を知りませんでした。精神を学ぶには年月が必要です。短兵急にはいきません。

身障対策でいえば、施設は急速に数を増し外観は大いに整いましたが、運営の実態は法規に従うことが精一杯で、身障者にとって何が福祉か、一番大事なことを誰もつっこんで考えません。国際障害者年のテーマが「完全参加と平等」を唱い、担当者が口を開けば、自立、生活保障を訴えますが、身

障者各個の人生の課題に個別的に配慮が行われていでしょうか。衣食住が足り、法が目的とする「社会経済活動に参加する」だけが、人生の必須条件でしょうか。人はパンだけで生きるものではないはずで、私はもっと人間性向上のためのきめのこまかい施策を考えてほしいと思います。それこそが画龍点睛がりょうてんせいというものです。

もう一つ私は外国の施設で、身障者を預けた家族が定期的に施設に奉仕する仕組みをみて、羨うらやましく思いました。

日本ではそれができず、預けたら預けっぱなしが多いのは決して貧しさだけでの問題ではないでしょう。それは社会福祉に対する理解と協力と責任感の不足です。家族を参加させ、家族も参加することによって、身障問題に対する社会の眼も変わってくるでしょう。

いま、老人問題同様、身障者についても「在宅」ケア付住宅が理想的といわれています。それにはまだ日本の社会事情が大きな壁になっています。

社会福祉は一部の篤志家によって行われる時代はすぎました。私は地域との交流を一層進めるべきであると思います。（1980年）

東京コロニーの社会的役割と意義

ー創立30周年に思うー

「東京コロニー」が事業所として誕生した昭和26年に、日本はサンフランシスコで資本主義陣営28カ国と対日平和条約に調印した。これを促したものは冷戦であり、朝鮮戦争であり、その後の日本の立場を決定した。幸い、それより二年早く、曲がりなりにも、身体障害者福祉法ができていた。それから30年、過ぎてみれば早い、思い出されることどもは数限りなく、終るところを知らない。

われわれは始め、結核回復者、実は未回復者がトコロテン式に退所してくるなかで、これに職と住とを提供する運動に死にもの狂いであった。

結核が下火になるにつれ、その後遺症である肺機能低下者を内部障害者として身障福祉法の対象に加える運動にとりくみ、3年かかって同法の改正をみるにいたった。

これは東京コロニーが結核と障害者対策を兼ね、昭和四十五年以来社会福祉法人として身障授産施設に主力をつくして今日にいたるきっかけとなった。ときはあたかも高度経済政策のもと、社会福祉全般が脚光をあび、各施設が内容の整備充実をはかることができた。しかし、すべてが形を整えるに急な嫌いがあった。それというのも、資本主義体制下の社会福祉はいわば「飴と鞭」とのそしりを免かれず、本来の民主主義にほど遠いものがあつたからである。このようなときに国際障害者年10年の運動が始まったのは偶然であろうか。基礎固めに30年を闘ったわれわれは、あと10年をかけて社会福祉の真の精神を具体化して世に問うべきではないか。

東京コロニーは社会的に弱かった結核回復者や障害者のために存在した。しかし、その弱さとは体力の限界にすぎない。人間としての真の強さとは自由と平等を信じて行動する人間性にある。弱さを誤解する社会のあやまった差別意識を払拭しなければならぬ。職や生活の保障もなくしてはならない

が、それだけで人間性をかちとったとは言えない。どんなに体力や機能が欠けても人間は人間であり、平等である。その自覚なしには福祉は天下りの思恵に終わるであろう。

恩恵必ずしも悪くはない。しかし、ぬるま湯のような恩恵につかっているのは、それこそ「飴と鞭」の思ふ壺である。偉大な精神と事業とは不遇と貧しさのなかで練られている。人間の根性は十年や二十年の短期間に改まるものではないが、東京コロニーの過去30年は決して無駄ではなかった。われわれはいつも法に甘んずることなく、不備な法を破ってでも、弱者に味方し、その必要とするものを主張し要求した。そのためには常識が破産するぞとおどされても、あらゆる困難に堪えてきた。

国際障害者年は日本のために設けられたとある人がいった。先進国はいまさら何をいうか、その必要なしとし、後進国はまだそれどころでない。二十年早すぎると。私は言おう、障害者年は東京コロニーのためにあると。移り気な日本人が障害者年を忘れる日も近いだろうが、われわれは過去30年の意味を生かし、さらに一層の真の充実を目指して進もう。それは見る眼に発展の形をとろうとするまいと、事業そのものよりも、ひとりひとりの自覚こそがかなめと、帯を締めなおしたいと思う。

(1981年)

国際障害者年第2年

新年おめでとう存じます。

毎年のことながら、新年はなぜめでたいのか?と問わずにおられない私ですが、この新年ばかりはためらうことなく、大きな希望に胸をふくらませて、めでたしと新年を迎えたことでした。

ご承知のように、昨年は国際障害者年の掛け声で年が明けました。それでも、過去の国際婦人年や国際児童年がそれほどの一般の関心もなく終ってしまった印象から、障害者年も同じ様に龍頭蛇尾かとたかをくくっていました。しかし、それは私の大きな誤りでした。と申す、のは、日が経つにつれて、宣伝が具体的な運動の軌道にのり始め、新聞やテレビが連日のように障害者にかかわるエッセイやニュースをとりあげました。社会の各方面で標語の「完全参加と平等」がうたわれ、さまざまな行事が繰り広げられました。それが終るころは行事の応接にいとまなくらいでした。

こうしたわが国の熱が入った取り組み方には、国連の当事者もたいへん驚いたようです。恐らく世界のどの国よりもさかんであったでしょう。その理由は、裏を返せば、障害者に対する日本人の理解が今まであまりにもお粗末で、ごく少数を除いては、ほとんど意識さえしていなかった反動と言えるのではないのでしょうか。したがって、一年間の活動の成果は国民の障害者を見る眼がたいへん変わったことを第一にあげましょう。いままでは、障害者には目もくれないばかりか、なにか異様な存在と見、社会の一員でないかのように考えていなかったか!

最近、外国では「障害者という人はいない。障害をもった人がいるだけ」というように、言葉の使い方まで変わってきました。わが国でも障害者のなかから、「障害者は障害を意識していない。障害をつくるものは社会である」との声さえ聞かれます。

さて、ここに年が改まって新しい障害者年、第二年を迎えますが私が希望に胸をふくらませた理由

の第一、は、宣伝から実戦へ踏み出す年だということです。障害者年の意味や目的がわかったというわけでは足りない。

それが具体的に実現されなければなりません。国際障害者年を一年といわず、国連が始めから十年を規程したことは故あることです。法律や制度を改め、これを実現するには年月を要します。スローガンだけで終わらないために国連は10年後の実績の報告を要求しています。私は熱しやすく冷めやすい日本人の性格を思い、第一年がハッスルしただけに、実戦に果してどれだけいどむか、この第二年こそはその試金石と覚えてなりません。そこに期待が大きいだけ、それだけ希望も大きいのです。

それでは何から着手すべきでしょうか。障害者対象の問題は山のように積まれています。住居・交通・就労・教育・生活保障…と数えあげれば際限がありません。

各人がその担当部署で一步、十歩と前進に努力すべきは申すまでもなく、直接障害問題にかかわりなくても、ボランティアとしての義務がだれにもあるでしょう。私はそれらの何れをも軽くみるのではありませんが、大局からみて忘れてはならないことは、国連も強く要望している世界平和・戦争防止・核兵器廃絶の問題です。それらと障害者と何の関係があるか、迂遠ではないかなどと言わないで下さい。

戦争こそは障害者を一時に最も多く生みだすのです。たとえ直接の傷害を受けなくても、戦争による難民の増加、生活の窮乏、栄養不足がどんなに大きく禍いしているか。無差別の爆撃、枯葉戦術、飢餓によるビタミン不足、貧血などが数知れぬ障害者を生んでいます。いま全世界の障害者は四億五千万と推定されるのです。いまや行政改革に名をかりて福祉は見直され、防衛拡充が先行しています。私たちは障害者対策を真に実りあるものとするために、あらゆる努力を各方面に押し進めたい、とくに戦争防止に、と思います。国際障害者年は実戦の第二年に入りました。どうかこの年をめでたく終らせる道を真剣に考え、闘ってください。ご健闘を祈ります。（1982年）

（編者付記）

この章には「東京コロニー」「東コロ」という語がしばしば出ますが正式名称は「社会福祉法人・東京コロニー」です。現在の従業員は708名うち障害のある人は355名。「トーコロ」はこの法人の部内報です。著者は1959年から28年間この法人の理事長でした。また「全国コロニー」「ゼンコロ」は全国13のコロニーをまとめた「社団法人・ゼンコロ」を意味します。

東京コロニー部内報より

1980-87年

1 車中偶感

▽さる日、仙台まで日帰りで講演に出かけた。その準備のため、ゼンコロの長野総会をサボらせて貰ったので、どうも気がひける。活字を小さく願ひましょう。

▽東北という暗いイメージとうって変って、車窓にうつる沿線の秋は、雲ひとつない陽に映えて、雑

木林の紅葉といい、枝もたわわに鈴なりの柿といい、私の目と心とをたっぷり洗ってくれた。人と物とがすべての都会のあじきなさ。

▽東北新幹線の工事は七分通りできていた。近代技術の進歩を誇るかのように、山も川も村々もそのけと、わがもの顔に突っばっていた。2年先には東京―仙台二時間とか。人間の知恵はそらおそろしい。これでいいのだろうか。

▽地図づらとちがって東北も広いと思った。列車がひた走っても、野も山も畑も延々と続いていた。自然は人間の営為にびくともせず、おのれのたたずまいを護っている。自然は人間より強い。たかが新幹線、通るなら通ってみると言わんばかり。

▽私は思った、人と物ばかりの生活を自然は笑っている。何をあくせくマスコミと政治に翻弄されているのか。金と機械に奉仕してみじめと感しないのか。

▽おふくろの味とよくいう。食物、ばかりではない。人間には誰にも持って生れた味があるはず。お早う！ 今日！ を繰り返す間柄で、何もかも知りあっているような、お互いの錯覚のむなしさ、私には何かがもの足りない。人間にはもっと深い味があるのでないか。自然があんなにも深いからには。

▽じっと胸にたたんで、言わず語らずが、奥ゆかしくて、かえってよいのかしら。話し、笑い、冗談をいい、時には口論し、かげでは悪口もいい、心の底ではちょっぴり、うらみ、ねたみ、憎みもし、そして仕事は片付けて、さよなら、また明日という。そんな毎日を繰り返して、いつか別れる時がきつとくる。

▽送別会、告別式、どれもこれも上滑りのものだ。もっと人間の味をぶっつけあうことはできないのか。素面で裸になれる人間になれるか。それが人間のさだめさ、と言ってしまうのか。君も僕も。その名は心障者。車中偶感。

2 意識の改革

▽国際障害年のスローガンについて、「ゼンコロ」誌や「コロニーセンター」1月号にわたしが書いた反駁めいた雑文があちらこちらで批判を呼んでいるよし、賛否いずれにしても、よろこびたい。

▽反応があるということはお互いに生きている証拠であろう。リアクションもアクション(活動)のひとつであるから。

▽わたしはとくに障害者の側からの反応をききたい。わたしをふくめて健常者をもって任じている人間の意見はどこかウワ滑りしていないか、大事なところを射ていないのではないかといつも思う。▽それはそのはずで、それでいいとは言えないが、それ以上どうしようもないだろう。ものごとを知るということは体験のうえに立つてはじめて知ることなのだから。健常者はわかっちゃいないというべきだ。

▽国連の障害年担当者連中のなかにはかなり重度の障害者が参加しているときく。日本では言いわけ程度にすぎないようだ。片手落ちではないか。いろいろの施設が生き活きと動かない理由でないか。

▽もういちど、問題をはっきりさせておこう。ノーマライゼーション(平等)も健常者の意識の革命を要する至難事だ。不可能だとは言わないが、10年そこそこでできると甘く考えてはいけない。

▽もっと度を越す不可能は障害者が自らの運命を仮にもノーマルとか平等とか感じる日がくるのか？ 誰か私に教えてくれないか。

3 記念事業費の内側

▽国際障害者年も四月に入ったというのに、各種各様な呼びかけや計画ばかりで、これでは国障年もお祭り騒ぎに終るのではないかと危ぶむ声がきかれる。私もそう思う。性急であろうか。

▽国障年記念事業費と称する国の予算が9億余円といえ、きこえはよいが、内訳を知ると何とも淋しい。八億円は福祉センターと仮りに称する建物の費用である。

▽日本人はセンターという片仮名がお好きである。センターと言っておけば打ち出の小槌のようにそこからあらゆるよきものがとび出してくるような錯覚を抱くのでないか。

▽その建物をごく一部の障害者が喜んで利用する。たいへん結構なことだ。しかし、全国の障害者にとってそれがどれだけ役立つのだろうか。

▽建物は推進本部とかでお役目を担当するえらい方たちの、そのまたトップ連の功績を半永久に記念するだろう。これだけが確かである。

▽それもいいだろう。残りの1億円でいくつかの大会や表彰式を行うだけか！ それらも目をつぶろう。私が言いたいのは別のことだったのだから。

▽私とて障害者対策の難しさにお手上げの態で何ひとつできていないのだから、大きな口はきけないが、障害者対策の多くが、始めは文字通り障害者を対象に手をつけ——それは素晴らしいことだ——そして軌道にのると段々事業化し、いつの間にか障害者が看板になっていく傾向がないか、と私はおそれるのである。

▽むりもない。自由競争という資本主義体制のなかでの仕事だし、たとえ何がしかの補助金を貰っていても、障害者を社会人としていまのような社会に参加させるのがそもそもの大きな目的であってみれば、仕事、それも金になる仕事を追いかけ、障害者ともども体制のなかで泳がざるを得ないのだから。

▽だから、わかっちゃいるのだが、ただそこに落とし穴があって、先の話じゃないが、障害者のためとは言いながら「建物」に気をとられて、肝腎の障害者を忘れないまでも、すくなくとも関心の中心からは障害者の影がうすれていく危険があることを指摘しておきたいのだ。

▽そこで、「障害者よ団結せよ！」なんてバカなことを私は言わない。言えない。闘える障害者も少しはあるがそれはそれでたのもしいが、仲間と語りあうことすらできない障害者が決して少なくないと思う。「建物」には入れない人、いわば落ちこぼれと言ってもよい。

▽この人たちに対して、私が慈善を要求していると思ってくれるな！ めっそうもない。私は解決の途を「福祉の技術」の向上に求むべきだと知っているが、それもその土台に人間に対する価値観の革命がぜひなければならぬと信じている。

▽いまは価値観なんて云々する時代でないと言われるかな？ 私はそうは思わない。精神に土台をおかなければ、何ごとも「砂の上に家を建てる」結果を辿るであろう。人間はみだりにすぐれた物やことを愚かにも追い求めている。

4 リハビリの要

▽右手ききの人は左手では字を書けないと決めているが、一旦右手を失うと結構左手で字でも絵でも書くようになる。目の見えない人にとっては、ひたいが自の代りをしてくれる。人間にはリハビリでよみがえる機能がまだたくさんかくされているのではなかろうか。

▽昔、むかし大昔には人間はみな天使のようだったが、次第に人間としての大事なものを失って、今日のような「人間みな障害者」になったと考えてはいけないか。

▽五体の故障と人間性の不具といずれが人間として大きな障害だろうか。五体満足、健常者をもって任じて「障害者」を差別する世間がチャンチャラおかしい。

▽話変って新年度は新社員が多いものだが、私は新しい顔と名とを早く覚えたいと思う。顔を合わせる機会が少いうえに、記憶力が悪い私とくは、それが無理な願いとわかっているが、誰々さんと呼べないまでも、同じ屋根の下だもの、お互い誰であろうと、せめて「お早う」くらい交わしたいものだ。「今日は!」を一日に何回言ってもむつつり通るより笑いがうまれてよくないか。

▽東京コロニーには「障害者」差別は毛の先ほどもありません。なくてはならない努力の目標は人間性のリハビリです。世知辛い世の中に住み、大きな図体にありがちな組織という網にひっかかっているなかで、わたしたちの人間性のリハビリの第一歩を「お早う」から始めたい。新入社員歓迎の辞。

5 石川啄木伝をよむ

▽中野のコロニー読書会は、月一回ながら、また休み月もあったが、3年以上続いている。

▽七月には、「愛の永遠を信じたく候」と題する、沢地久枝さんの石川啄木伝を読んだ。

▽啄木の詩に深い親しみを覚えた若い日の思い出をもたない人は数少ないだろう。それほど、彼の詩人としての天才と烈しい人間性が二十七年の短い生涯に燃え尽したと言うべきで、私たちを感動させたのであった。

▽しかし、虚飾なしに忠実に事実を綴ったこの伝記は、私たちのこれまでの啄木観に大きな衝撃を与えた。天才と狂気とは紙一重といわれるように、異常なまでの才能であれば、人間性も際立ち、前者も後者を制御しえなかったことをうべなわねばならないだろう。

▽天才と凡庸と、正常と狂気と、いずれを幸いというか、不幸とするか、私はしらない。すべて天の所与と私は見たい。妻節子の生活は不幸であったと言おう。しかし、愛を信じた節子は幸福であった。ただ、最後まで信じたか、いつから、信じたくという希望に変わったかを私は問うまい。破れと罪とは影の形に添うように人生の運命であり私は他人の弱さや罪を責める資格をもたない。

▽小説も伝記も、人間に与えられるさまざまな運命の経緯を画く。そこに闘いがある。勝負は問うところではない。人はみな所与を異にし、かつ、他者の生活のうら側を知りつくす能力をもたない。それぞれの体験はなぜかベールに包まれている。

▽読書会は少しでも多く他者の生きざまから、各自がそれぞれの生き方の糧かてをとり入れるいとなみのひとつになろうと、私は考えている。

6 コロニー30周年

▽東京コロニーはいま、「30周年」でだいぶ気負っているようだが、世話役から煽られるだけでは空振りに終わらないか？ 30年間の苦労を身をもって体験した人、少しでも辛酸をなめてきた者には、過ぎた30年は感無量だろうが、その人数は知れたもの、大多数にとって30年は何だろうか？ 水をさすようで恐縮だが、記念とか祝いとかの意味が徹底しないことには、行事負けしないか、と案じられる。

▽三十、三十と口にしていたら、「三十にして立つ(而立)」といった孔子を思い出した。最近批孔などと言って、かつての孔子さまも散々だが、私も孔子は好きでない。それはさておいて、二千五百年も昔のことだから、人はみな短命だったに違いなく、早熟だったとしても、その頃の30歳は、いまなら六十歳としてもよいだろう。東京コロニーはまだ自立していない年齢と取えて言える。

▽その孔子は15歳で学問に志し(志学)と言った。いまなら30歳、わがコロニーのとし、コロニーも孔子を真似て、コンピューターを学び始めたと言おう。コロニーはまだ鼻たれ小僧、成人式はずっと先のこと、思い上らぬがよい。

▽ついでに、私が孔子を好かないのは、四十にして惑わず(不惑)などと出来上ったようなことを言うからである。人間まどわなくなったらおしまい、いくらとしを取っても自信は禁物、幸い東コロは駆け出しの試行錯誤中と私はみている。ある仁がコロニーをもじってコロコロ転がっていると歌にしたが、まさに言えて妙。

▽ところで、記念とか祭りとかは、鎮守の森・豊年祭りを連想すれば、おこりは自明、思を忘れず、感謝のためということになる。残念ながら、東京コロニーには鎮守の森があつてないようである。しかし私は、日露戦争から凱旋した乃木大将の心境だったのか、「一将功成つて万骨枯る」の一句を思う。記念すべきは、30年の間に、算えきれない人たちが陰で流した汗と涙、それは今も同じ。それなしに今日のコロニーもなければ明日のコロニーもないことだ。倒れた人も少なくないし、怒って去った人もある。その功績に上下をいわない。また、形ばかりの「黙禱三分」もしたくないが、「枯れた万骨」こそ、ブレ何とかの主客でないのか。天の邪鬼の妄言多謝。

7 国際障害者年記念式典

▽12月9日、国連が5年前国際障害者年を決めた記念すべき日、九段の武道館で国際障害者年記念式典が行われた。調常務が表彰されることだし、アメリカの聾者劇はどんなものか見てみたいのとで出かけた。一時間も早く着いたのに、お倉の上の上へと積みあげる荷物のように押しこまれ、式典は山の上から見おろした。東京には人間をあれだけ多く鮪詰めできる会場がない(?)からでもあろうが、政府は武道館がお好きである。

▽九段には問題の靖国神社があり軍人会館や近衛聯隊の跡もある。武道館の武は文を止める意と一般に言われるが、止は人間の趾(足)の変形で、戈をもって行進することだと学者はいう。九段と武道館は「歩武堂々」を連想させる。その上「君が代」の斉唱ときた。僕は歌わなかったが、壇上のえらそ

うな人たち、障害者年の真意がわかっているのか?▽それにしても、会場の雰囲気盛りあげる技術は格段の進歩(?)だ。音と光りの交錯、鼓笛隊の耳を聳^{もよほ}する騒音。式典を演出する一方、大衆をけむに巻く手のようだ。

▽現代人はおおぜい集る、そのことだけに心惹かれるという。観光地や行事に出かけるわけ。多数の中にいる方が自立の反対でラクである。そういう人間の方が^{まよ}御しやすい。かくてはもう一度線總白痴にならないか、危ぶまれる。

▽式なかばで、この日を毎年「障害者の日」とすると宣言があった。それはよいことだ。わずか一日でもまるきり忘れてしまうよりよかった。しかし、「障害の日」とすべきでなかったか。めくら、つんぼが差別語なら障害者も差別語だ。人間はみな障害者(それが事実!)というならわかるが、障害人という人間が別に存在するわけではないのだから。

▽ともかく、障害者年なるものは終わった。そしてそれだけの効果はあったが、真の成果は今後にまたねばならない。東京コロニーがこの記念すべき年に満30年を迎えたのは偶然にしても、先駆的だった30年の歴史をふまえて、今後IYDPの理念の実践にどこまで先導的役割を果しうるか、これこそ観ものであり、その責任はみんなの肩にかかっている。忘年会もいいが、苦労のなかの大事なものを忘れてはこまる。苦労は積み重ねるべきものの、「いくたびか辛酸をへて志始めて堅し」であろう。よき新年を迎えて下さい。

8 巻頭言の要

▽新聞に社説があり、雑誌に巻頭言がある。「トーコロ」誌にはそれらしいものがない。巻末言を書くこともう七回、いまに至って、この奇妙^{きてれつ}奇天烈さが気になった。巻末言は巻頭言に代るものではない。

▽外国の新聞・雑誌にはエディターが必ず一筆している。編集長か論説委員というところ。それは責任をもつ発行者の考え方を語ることゆえ、短くとも貴重である。

▽外国語、といっても私は1、2しか知らないが、主語を欠くことはまずない。それに反し日本語は主語なしに通じる。以心伝心のよさでもあるが、主体性を欠きやすい日本人らしい欠陥でもある。

▽巻頭言がないのは、主語がないに等しい。誰が発行し、何を主張し、実行しようとするのか、はっきりしない。そこがトーコロのいいとこさ、情報交換さ、といってすましている。それ以上、おもてだつては何もいわない。これでよいの、か? そとに向つていうことは、うちにむいてもいわねばなるまい。

▽隗(カイ)より始めよと言われそうになってきた。誰か、その任に堪える勇氣ある人は名のり出ないか!(うしろから読む人もいるそうである)。

▽ある日、ある福祉施設で、一部の職員と話しているうちに、話がたまたま「社会福祉」の意義におよんだ。社会福祉は個人の福祉に重点をおき、それが社会の福祉になっていくのか、否、地域社会の福祉を考えるのが先だとする、二つの意見に分れた。どちらも理屈や結果としては同じであるが、施設経営者としては、何れにアクセントをおくか、少くも、後者をうとんじてはならないことになった。

▽個人の幸福は、恩恵や慈善としてそと側から与えるべきではないと誰もが口にはするが、慣れると

一個人の、または集団の、利己主義に知らずして陥る弊がある。経営者ぐるみ、施設の利益に傾き、それをもって社会福祉だと誤認することもある。恐ろしいことだ。

▽世が滔々として、政治家、大企業を筆頭に、おのれの利のみを眼中におきながら、そうではないように装うとき、心ある社会福祉施設は、この風潮に流されまい。たとえ、窮屈でも、角がたとうとも、ひとりひとりの覚悟が要するという話で終わった。これはフィクションではない他山の石。

9 「本音を吐く」ということ

▽「トーコロ」を読んだ友人から「みんな、よそゆきですね、もっと本音をききたい」と書いてきました。わたしも本当にそう思います。そして、いろいろ考えたのですが、ざっと次のように返事を認めました。

▽僕も君の読後感にしごく同感なのだが、なぜみんな本音を書けないのか、書くとあたり障りがあるのか、また人はこれが自分の本音といえる確かなものを持っているのか、それから、これはトーコロだけの問題なのか、本音とはいったい何か、などと僕なりに考えてみたのだが、以下僕の本音を批判してくれないか。もっとも、これが僕の本音と言えるかどうか。

▽ふつう「本音を吐く」という。吐くというのはふだんめったに口から出さないものを出してしまうもので、思わず出てしまったり、ゲーゲー苦しんで出すもの、他人の前では出さないのが礼儀で、出したものはつばきひとつでもきれいとは言えない。

▽しかし、これは日本人だけの感情であって、外国語の多くは「外へ出す」という意味の動詞を用いる。漢字の吐も大地はそこから植物などもろもろのよいものを出す意味で活力を示したという。

▽問題は僕たちが本音といっているものが、真実と称するに値するが、うらみつらみ(恨みと辛いこと)がまざっているかということになる。火山が火をはいて麓の村々が全滅することもあるように、ある一言で、トーコロが崩壊してしまう溶岩のような真理だつてないとは言えないし、野に咲く可憐な花同様にいつかトーコロを花一杯にするきれいな吐物もあってよい、あったらさぞよかろう。

▽ところが、なさけないことに、人間のこころは、怨恨とまでは言わないまでも、いつも不平、不満が本音になり易いから困る。これは腹の底にぐっと押えておくのが賢いのではないか、場所が場所ならときにはそれを出し合ってしまうのも瀉下療法になるが、やたらにそんな本音を吐いたらせつかくの平和が乱される。僕は本音を吐くなと言うのでないことは君も分ってくれるだろう。本音を吐くにはそれをよく吟味する知恵が要る。

▽この世の中は残念だがお互いよそゆきでつきあっている。おれはざつくばらんだ、歯に衣着せぬと言っても疑わしい。人間は真実だけを求め、振るまう熱意や才覚に乏しいばかりか、利己心のかたまりだからであろう。組織体のなかに首を切られても悔いない刎頸の友なんか容易にえられない。日本の組織には職務以外の上下関係がある。封建制の遺物ですよ。

▽と申しても、感情ぬきの建設的な意見をききたいものです。感情ぬきにそれを聴く耳をもちたい。小さくても真実は山をも移すと信じますよ。妄言多謝。

10 沖縄敗戦記念日

▽6月23日、新聞やテレビはトップニュースで東北新幹線の開通を報じ、東北の地元は熱気あふれるお祭り騒ぎであった。なにしろ総工費2兆8千億円と11年の歳月をかけ、それも多くの反対を押しきっての完成だから無理もない。私もいずれ利用せねばならないだろうが、スピードアップは真の文化を殺ぐことを思うと、喜ぶばかりでよいのか。しかし、それよりも何の因縁でこの日開通ときめたのであろうか。今日は沖縄の敗戦記念日でないか。

▽都下の大新聞はこの日、「天声人語」を除いては沖縄について一行も触れていない。NHKテレビは最後の激戦地摩文仁の丘がある糸満市で、沖縄全戦没者追悼式と平和を祈るデモ行進のスナップを映したが、それも数秒で消えた。恐らく全島が追憶の気分浸っていたであろうに。日本は広いし、沖縄は片隅だと言えればそれまでだが、沖縄戦は本土決戦を考えた軍部の時間かせぎであり、日本軍9万、それより多い住民12万の死は余りに大きな犠牲でないか。広島・長崎の悲運とともに、その記念の日くらい全日本が喪に服するのが本当でないか。忘れさるのは早過ぎる。

▽5月15日、沖縄復帰10周年を迎え、那覇市と東京で記念式典があった。目に見える沖縄は戦後の面影を一掃して復興した。しかし沖縄戦は実はまだ終わっていない。革新団体が政府の沖縄政策を糾弾する県民大会をこの日沖縄で催したのも当然と思う。沖縄が再び本土の砦となる日がないと誰がいえよう。

▽6月5日、中野読書会は真尾悦子著「いくさ世を生きてー 沖縄戦の女たち」を読みあった。沖縄戦を語る本は数多いが、これは他に類をみないもの、戦後30数年語りえずに胸に秘めていた婦人たちの深い傷痕が、山の葉がぐれに浸みでる真清水のように、ときにはまた堰を切って近出泉のような語り草の連続である。本島の南端地区を島尻というが、首里の攻防に敗れた5月から島尻さして住民ははげしい梅雨と砲弾の雨のなか、屍をこえ、家族とはぐれ、食もなくあてもなく、逃げさすらう月余の地獄絵、敵兵ならまだしも日本兵から追われる無残さなど、それは同じ苦しみをなめた人でなければ分ってもらえず、語るもためらう秘密であったにちがいない。

▽戦いが終わった夜、野天で芋の配給を受け、久しぶりに脚をなげ出した老父がしみじみ口ずさむ古歌「命^{ぬち}どう宝」、これこそ実感であったろう。何10万の宝の生命が意味もなく苦しみ消えていく戦争は憎むべしである。憎もうではないか。

▽来る9月、ゼンコロの野球戦が沖縄で行われる。応援を含め100人以上がかの地を訪れる。この機会に初めて戦跡を巡る人も多かろう。生い茂る夏草が何を語るか、どうか沖縄の秘められた心を深く偲んできてほしい。今、沖縄の繁栄は米国のおかげと考える人達も多いときく。富は真実を見る目を曇らせる。国、事業、個人、いずれにとっても富むことは恐ろしい。金を愛するは諸悪の根源。

11 「逆光の中……」

▽わたしたちの読書会で今回は「逆光の中の障害者たち」をとりあげようと思っている。著者は後藤安彦とあるが、本名は有名な二日市安さんで、副題に「古代史から現代の小説、映画にいたるまで、よくもまあこうも沢山障害者の話があったものとその勉強ぶりに驚いた。あげられた障害者は四十三

人だが、全編対話風だから読みやすい。

▽わたしは最初、はじめて知る話が多いのと、わかりやすいのとで、ただもう面白さに駆られて読んでいたが、途中から「逆光の中」が気になり出して、ゆっくり読みかえさないわけにいかなくなった。

これは単なる歴史のなかの障害者物語や、それぞれの時代の障害者観の紹介ではなかった。ここでは障害者存在の意義が問われている。解答ではなくて、読む者が考えねばならない責任を感じる。

▽カメラを向けるとき、「そりゃ逆光だよ」と人はよく注意する。逆光の中では物も人物も、見慣れた本物とちがう。逆光でなければ写し出せない美しさを見せるのが芸術写真でないか。なんでも見えると思っている健眼者、わたしたちは見るべきものをみていないのではないか。といっても、逆光ではなにも見えないことがある。

▽有名な英国の作家H・G・ウェルズの作の中に「盲目の国」という話がある。生来の盲人ばかりの種族で孤立した国があって、そこに住みこんだ健眼の青年があった。この種族の一人に腕ききの医者が出たので、年長のひとりが青年のことを怪しんでその医者にたずねると、「あの病気ははっきりわかっている。あれは治りっこないさ。脳をやられている。あれには眼というおかしなものがあって、顔のまんなかにか柔かいくぼみをつくっている。手術は簡単で、これをとってしまえば完全に治り、正気になって、りっぱな市民になります」と答える。質問した年寄りは「ほんとうに科学が進歩したおかげです」と感謝する。(E・フロム著「正気の世界」から)▽正気と、ばかり信じていたえらそうな人たちが、「侵略」というレッキとした事実を「進出」と言いやり、それが教育だとする国は正気の世界であろうか。疑えば怪しい問題がキリなしにある。五体満足が正気の世界ではないのだ。ちかごろ、一億総不健康といわれるが、むしろ総障害者であり、「盲目の国」のように、わたしたちは障害の意味をはきちがえている「脳をやられている」障害者ではないのか。

▽朝日新聞が内外の著名な学者による「科学の進歩と危機」とかいうシンポジウムを催した。最近の急速な科学の進歩が、一方に大きな危険をかもし、だしていることを誰もが指摘していた。たしかにその通りで、大がかりだった国際障害者年も、科学の域から一歩もはみだしていないのではなかったか。進歩したりハビリも高度の授産も、それだけで「りっぱな市民になれるのか。」いままでの障害者観を改められるのか。多くのえらい人はもちろん、障害者自身も何が真の障害かを考えなおそうではないか。そしてわたし自身こそ考えねばならなかった。道は遠い。

▽本を読む時間のない人も読書会に参加かんげいです。付、ここまで書いてきて、私が障害の害の字を不用意に使っていた不明のある文章で教えられて、穴あらば入りたい気持。これは稿を改めて書くより手はない。

12 D・P

▽前回のつづきを書かしてもらおう。国連が「障害者の権利宣言」(1975)を出したり、「国際障害者年」(1982)を発足させたりしてから、わたしのみるところ、どうも「障害者」という文字が独り歩きをはじめたようである。それもことわりなしに横行おうこうしているとさえ、言いたいくらいである。▽たかが文字だ、かつてに歩かせておけばよいじゃないかと言うかもしれないが、そこには問題がある。放っておくと、末恐ろしい。いままでは、「障害者」の上に、身体とか視力とか、かならず肩書

がついていたではないか。辞書にはただの「障害」はあるが、「障害者」は見つからない。「現代用語の基礎知識」にもっていない。来年版はどうか知らないが、「障害者」という文字は住所不定、無籍のならずものである。

▽ことばの解釈というものはあなどりがたい。新造語までなくても、各人各様な解釈をしてしまい、それがいつのまにか、習い性となり、もともとそうであったかのようにまちがった意味がそのまま腰をすえてしまう。コロニーを印刷屋とこころえている仁があるようなものである。

▽独り歩きの「障害者」は略して頭文字でいうD・Pの訳字である。正しく訳せば障害のある人である。障害者と訳しても障害のある人と解釈できるのだが、そこが日本語のあいまいなところで、障害者という特別な人間がいるようにもうけとられる。そこに「健常者」という対立語が不用意に用いられ、障害がない人と特別に健康な人がいるかのような錯覚をもち、自然と差別をかもしだす。

▽国連がきめたD・Pの意味はひろい。外傷で一時期何かができない状態もD・Pである。日本では1970年にできた「心身障害者対策基本法」で障害の範囲を狭くきめてしまった。たとえば精神障害者、てんかん、難病などはこの枠に入らない。だから日本人は「障害者」というだけで法律できめた特殊な人と考える。

▽NHKで国際障害者年を担当した野原さんがある座談会でいっている。漢字の「害」は害虫、害鳥などのように、人間の生活に危害を加える、よからぬものという印象を与える。だから人間にあてはめて用いると、文字から差別意識を強める。せめてかなを用いたらどうかと言い出した。もっともな話である。

▽東京コロニーのなかに差別はないといってよいだろう。けれどもなかだけで、ないない言っていてよいものじゃないはずである。東コロ30年祝典が終って、どんな感慨がみなの胸に残ったことだろう。誰もがさかんだったと思っただろう。私はあのさかんは、差別なしの自立の精神の成果だと思っただが、なかだけのさかんではまだいかんの感を禁じえなかった。

▽国際障害者年に東コロが30年の区切りを迎えたのは偶然だろうか。国連が東コロのために一九八一年を選んだのかもしれない。これはどっちでもかまわないが、東コロの今後の目標の重点をみんなして考えようではないか。

▽わたしはそれこそ完全参加と自立だと思う。しかし、この二つとも日がたち目に耳に慣れっこになるにしたがって、心に訴えるものが薄れて来た。私たちは自分たちの事業がさかんになっただけで、満足していないか？ 完全参加は自立なしには中途半端であり、自立は差別の克服から始まる。人間がもつどんな能力も人間であることとなんのかかわりもない。人間は人間であることで平等である。障がいをもつ者からなぜこの主張が叫ばれないのか？

▽わたしは東コロ自体が先ず自立しているかと問うている。その矛盾は大きい。福祉国家といっても、その福祉は恩恵と考える人もいる。真の自立はありえないと考えるべきか、目的と手段と使いわけよと言うか。八十にして或うか。立冬。

13 『いま人間として』

▽新年号への原稿が切が明日に迫っているのに、読みだしたら時間のたつのも忘れてしまったいま、

この本の紹介をして、責めをふさごうと思いたった。

▽この本というのは、先日「天声人語」でふと目にとまったもので、障害児教育を内容とするものだから「トーコロ」誌とは何の因縁もないようなものである。いわんや、新年とのかかわりもない。強いて言えば、わたしの胸にほのぼのと明るい希望の灯をともしてくれた意味で、いまの暗い世相とくらべては、めでたいと言えなくはない。世間なみに新年おめで守とうも言わず、とんでもない話で、新年号を汚すことになるが、お許しを！

本の名は『いま人間として』

▽勝弘君というCP、両眼球形成不全、高度難聴、話せず、歩けず、ねがえりもできず、知能の発達もおくれ、コミュニケーションもだめだという重・重度ダブル障害児の話である。だから、本能的に食べて排泄し、ただ生きているだけだから、ベッドの片隅に丸めた毛布のように、身じろぎもせず、はじめて見たときは「気持ちがわるい、異質な人間がいる、自分とは違うような人間がいるという感じ」と書かれている。考えただけでもさもあると思う。

▽福島県立須賀川養護学校が国立病院の小児病棟に出張して入院中の重度心身障害児のために特別のクラスを設けたときのこと。安藤という先生がこの児の小さい手をにぎって自分のほほにあて、自分の手は勝弘君のほほにあて、耳もとで「勝弘君、安藤先生だよ」と声をかける。耳はきこえないはずだが毎日同じことばと同じ動作を一日も欠かさず続けたというから驚く。

▽3カ月日に勝弘君が天使のような笑顔を見せる。6年11カ月目にはブランコにのり、漕ぎはしないうがしっかり綱を握っている写真もある。ここに経過を詳しく記す余裕はないが、進歩はおそくても確実な成長を見せたという。他にも似たような障害児に対する教育の効果を示した写真数葉が巻頭をかざっている。

▽私は教えるということの原点を見せられたおもい。教育は技術でなく、その行動は千辛万苦を要する闘いである。最大の難事は「自己の内なる敵、自己に巣食う権力者性との戦いである」と教えられて私はペしゃんこにならざるをえなかった。

▽「どの子ども(私は大人もと信じる)例外なくかけがえのない宝をどこかにしまいこんで持っている、それが生きるということ」、「自立とは未成熟な生命の成長」で、「自立は教師が一步さがって控え、軽くささえる、あるいは「そこに居る』というだけ」などなど、いくつもの金言を私は見つけた。それは春が来て固い氷がとけていくような喜びを誘う。

▽わたしはかねがね医療は教育だと主張してきた。薬や技術は教育を媒介する手段のひとつであろう。心身障害児(者)対策の原点もまたここに在るのであるまいか。障害をもつ者の傷つき易いまいか、かくされた宝を扱うには、それだけに細心の、軟かい人間性をこちらがもちあわせねばならないことであった。

▽国際障害者年第三年行動の年を迎える心のおき処はきまった。

14 権威主義のなす業

私がこの頃機会あるごとに主張していることは、皆さんもうご承知と思う、障害をもつ人間を別の人間であるかのように差別し、自分を健全なものと考えている人が多いが、その人たちこそ障害者と

言ってよいということである。

なぜって、人間にとって一番大事なものは、口や手ではない。その証拠には、それらをまったく失った人も人間であることを辞めたとは思っていない。その人のなかに、かえって本当に人間らしい純なものが多く、人間として健全なことを感じさせる人がすくなくないからだ。平均的に言っても、いわゆる健全者に事業や名声や金銭を、後生大事と口には出さないが、これを追いかけている人の方が何らかの障害をもつ人より多い、と言えるのでないか。私も自分をかえりみて大きな口はきけないと思う。

私はここ2カ月以上かかって、住井すゑさんの長編六部作『橋のない川』、ざっと三千頁をよみ終わろうとしている。若いころは別として、長編ものを手にするのは絶えて久しくなかった私だが、異常な興味をもってこれを読みつづけてきたのも、人間差別を扱ったものだからであった。

それは誰も知っている部落問題だが、私はその差別がこうも深刻、残酷であるとは知らなかった。それは長い長い間に広く深く上から強いられ、無知がそのまま語り伝えられたから、^{よう}香として抜き難い偏見となってしまったと言っただろう。

しかし、私はこの本で、真の原因は人の心の深いところにある、それは、人が本能的に欲する権威性のなす業であると教えられた。人は他よりすぐれた者になると、そこに権威を生じ、これが他を威圧し、自分に従わせたい欲を抱く。武力、知識、財力、地位、すべてその方便となる。そして一旦達成された欲はさらに欲をはらみ、一層権力をもって弱者に臨み、誇示するだけか、圧迫し、搾取し、ついには同じ人間を劣等な人間、人に非ざる非人呼ばわりまでするようになる。

天皇制、今はないが華族制度、位階勲等、資本主義政治など権威の表徴はすべて差別を生む悪の温床で、数えあげる暇もない。これと闘うものは、部落問題も障害者のそれも同じことで、権威に対する平等と自由の主張である。ただし、その道の何とせまいことか、人の本能は改め難く、自由と平等の真の自覚が乏しいからである。2月の中野読書会は、家庭学校を創立し、生涯をこれに打ちこんだ留岡幸助の伝記をとりあげたが、このなかで、私の心に「最後のひとりの生存権を保全しよう」の一句が残った。これは家庭学校25周年記念にさいし、ある刑法学者が講演で述べたものだが、留岡の精神をよく尽したものと言いたい。

社会福祉事業の目的は実にここにある。障害者、寝たきり老人、犯罪者、それらの何れであるかを問わず、どのひとりをも分け隔てせず、すべて自由と平等を主張しうる生存権ある人間として遇し、各自が自由と平等の真精神に目覚めてもらうことである。私自身は反対に前号巻末言で「自己のうちに敵、自己に巢食う権力者性との闘い」を云々したばかりである。自由と平等を阻んでいるのは私かもしれない。

人の住むところ、川あれば橋がある。橋のない川があつてよいはずがない。しかし、差別の川には、水久に橋はかかるまいと、ひとはいう。そうかもしれない。しかし、IYDP(国際障害者年)十年の計画では望み難いが、私は百年、千年の先を夢みたい。それが難しければ、反核・反戦の願いも叶うはずがない。みんな同じ根から出た悪の華なのだから。

障害者の自立ということを目にして久しい。私もわかっているような顔をして、書いたり、しゃべったり、してきたが、省みて、わかっちゃいなかった、と恥じいつている。昨年10月から、実行委員会の名で、「障害者自立セミナー」というのが、東京で三回、これは日米合同ゼミの準備として行われた。本年3月、アメリカからその道のリーダー八名を招いてからは、日米合同で地方で六カ所、東京で中央ゼミが二回聞かれた。地方もたいへんな盛り上がりだった由、私が出席した前後五回の様子からもそれは想像できた。

いずれも身動きも容易ならぬ満員であった。私も大いに教えられた。実行委員や協力されたボランティアの方々の労を感謝する。

これに反して、私が意外とも残念とも思ったのは、施設からの来会者が少数だったこと(東京セミナーも例外ではなかった)。これは日本の施設にいる障害者の意識がどんなものかを物語っていないか。

IL(インディペンデント・リビングの略、訳して自立生活)運動が米国イリノイ大学の重度障害学生4人の要求から始まったのが1962年で、それが、20年後の今では全米で90センターをかぞえるという。ない所は、おおむね2、30年はおくれている。それというのも独創性に欠けるからとも言えるが、管理される生活に余りに慣れすぎ、創意や必要があっても、定められた枠から一步でもはみだす意見や行動で抵抗することには億劫な、勇気のない人間になりさがっているからだと思う。

伝統的な既成の殻が固いから、言いたいことがあっても、まあまあと我慢する。管理する側から見ると、その方がおとなしくて使いやすい。従って改革や発展がおくれてしまう。

最近、これもアメリカからはやってきた脱学校、脱病院、脱施設といった考え方は、従来の管理のしきたりに反発するものであろう。私は「脱」を一概によいとはしない。そこには一般社会の実情にてらして行きすぎるものも多くあるだろう。しかし考えようによっては、本当のこと、正しいことは一時権力から反対されても、コペルニクスの地動説のように、たとえ一人の力でも真理は勝つという信念をもちたい。長いものに巻かれてばかりいると進歩はない。

さて、IL運動は障害をもつ人たちの発相心から始まった。ここに大事な問題の出発点がある。障害者のニーズは障害者でないとわからない、そこには健常者が同情し真剣に考えたとしても、わからないものがあることを、健常者は自覚せねばならない。障害者対策の主人公は障害者である。私が省みて恥じると申すのはこのことだ。一般に自立といっているのは、「身辺自立」のことで、これとILと混同しないためにILを自律とする意見もある。自律は精神に障害ある人を除いて、どんな重度身障者にもあるべき人権の問題である。端的にいうと「自分の生活や運命は自分たちでコントロールしなければという権利意識」で、身近な例をあげれば、障害者はボランティアでない介護人を雇い、介護の範囲を定め、賃金を支払い解雇もする。ILは障害問題の革命である。

人権の平等と能力の不平等とが混同されるところに、管理社会のひずみが生じる。多数の人間が力を出しあって、社会をよくしようとすれば、組織と管理が必要だ。管理するもの、されるものが、各々の道をあやまると危ない。施設が法の上にあぐらをかいたり、福祉と企業とをあやふやにすると、人権はえてお預けになる。玉磨かざれば光なしとか、人権もみがこうではないか!

16 衛生講話

私が赤紙召集で軍医見習士官になったころ、兵隊を並べて営庭でやった大きらいな衛生講話なるものを、45年ぶりに、はかならぬ葛飾工場から頼まれた。20分という注文は短くてありがたかったが、二度とあるまいこの20分で衛生が話しおうせるものか。

「世の中に病気したい人、けがしたい人はまずいない。それだから、みんなずいぶん用心しているだろうに、人は病気もけがも免れない。食事まえに手を洗え、外出から帰ったらうがいしろ、くらいの衛生は誰も知っているが、役にたたないのか実行しない。講話して人を健康にする手はまずない。

毎年敬老の日になると、マスコミは百歳以上の老人を探して長生きの秘訣を尋ねる。学者は長寿村を訪ねたりして原因をしらべる。けれど一方、酒もタバコも大好きで90歳をこえる達者な老人もいる。だからと無茶をすすめるわけではないが、長寿は親ゆずり、健康らしいのは偶然かもしれない。

健康問題はいま花ざかり、マスコミは病気の話を欠かさないし、運動具庖は繁昌する。国民の平均寿命は伸びてついに長寿国の仲間に入ったが、青少年の体力は低下が問題にされ、成人病はふえるばかりだ。国民死亡の第一位はがんとなり、去年は17万8千とかががんで死んだ。皆さんの4人にひとりには癌で死ぬ。

国民が衛生に懸命であっても、公害、環境汚染、薬や食品添加物の害は制しきれない。過労は仕事ばかりかレジャーで疲れてる。無病息災は万人の願いだが、病気やけがは、忘れはしないのに地震同棟予告なしにやってくる。ポリオやCPにいたっては、当人はもとより親を責めても始まらない。一生医者のお世話にならぬと威張っても、早いかおそいか別として人いちとは死ぬにきまっている。この確かな運命を知りながら、人が健康に暮りたいのは何のためか。儲けて、遊ぶ、にとしては悩みが多すぎないか。

皆さんと縁のない死刑の話をしよう。死刑は刑が確定してから六カ月以内に行う建てまえであり、その日の朝知らされる。日曜祭日大晦日正月1、2日は行われぬから、年末30日朝知らせがないと4日間は安心である。でも執行日まで平均は2年6カ月という。死刑囚の緊張した日々が想像できる。

考えると私達だって2年半は大丈夫という保証はない。元旦さえわかりはしない。死刑囚が私達と違う点は、おのれの死を真剣に見つめてはなさない。私たちは死を忘れ、いや、考えまいと避けている。不吉な話はよそうと、忙しく働らき、暇なく遊んで死の運命を紛らしている。それを悪いとばかり言わないが、いよいよに及んで悔やまぬようにしたいものである。

みなさんは佐賀藩の『葉隠』という本の名を聞いているだろう。山本常朝という藩士がのこした武士道を説いたものだが、あの中に「武士道は死ぬことと見つけたり」という有名な言葉がある。武士にとっての一番の大事は主君のために死ぬこと、生きるのはその一瞬一瞬の積み重ねであり、一瞬に徹する外はない。一瞬に徹するとは、いつどんなときにも死んでよいとする決意であるという。そのため武士は毎朝化粧し、身繕いをきれいにした。汚れた肌着など着なかつたにちがいない。見上げた覚悟だ。

私はここに衛生の真面目があると思う。武士道と同様人生を人間が人間らしく生きることと言い換

えればよい。生を衛るためには不可解な死と向かいあいながら生の意味を考えるが一番だ」と話した。

17 「死」をみつめる

○君はこのごろ死ということをよく書くね。先が見えるとしだから無理もないけどね、死なんて陰気な話は、働きざかりの人には興味はないよ、見向きもするまい。

△それはわかっている。誰が喜ぶものか。でも新聞雑誌も安楽死とかホスピスとか、よく論じているね。これは単なる流行だろうか。大地震や核戦争が話題になるが、人類の破滅とは別に、ぼくはよいことだと思っている。

○僕だって死は避けて通れないことは分かっている。しかし、考えても分からない死は忘れて、毎日をおもしろせいおかしく暮した方が、仕事にだって精が出るというものだよ。

△ごもつともさ。ぼくも昔はつとめが第一で、死を考えるひまもなかった。そしていま後悔している。早くにもっと本気に死を考えていたら、大事なわかい時代をムダにしなかったろう。それはそうと、最近アメリカなどで、中学・高校で、死についての教育を、正式にとりあげてきたときいている。

○それはまたなぜだろう。そして、その内容は？

△実はぼくも詳しくは知らない。おそらく、人生に終りがあるから、かけがえのないいまを真剣に生きよということだろう。いまニヒリズムの傾向が多いから、その反動だろうさ。

○そうだろう。けれど学校教育なんかで社会の大勢を動かせるか？

△ぼくもそう思う。ところで話は変わるが、ぼくに線香をくれた友人がいる。仏壇のないわが家を知つてのことだから回向のためではなかった。沈香^{じんこう}や白檀^{びやくだん}などの高価な香料を入れた高級品？ でぜいたくな話だ。昔、貴族が衣類に香を焚きこんだ優雅さなんか、さらさらないぼくなのだけどねえ。

○でも、戦国の武士は出陣の時かぶとに香を焚きこめ精神の沈静をはかったとも聞いているよ。

△それだよ。ぼくは朝、未明におきたとき、これを机に一本立てる、何ともいえないよい香がただよい、落ちついた気分になる。それに音もなく虚空^{こくう}に消えていく煙りをみているのが好きなんだ。

○会者定離生者必滅ってわけか。人生の無常だね。何のために生きているのか、わからなくなるね。

△そして最後に死だ。人間にとってこれほど意味深長なことはない。自ら選んだわけでないのに、各人がこんなにも違う運命を背負って生きているこの不公平と不合理が、きりなく続くとしたら、実にばからしい話でないか。いまは仮の世界であって、別の世界があると考え出すのも当然ではないか。

○それは宗教の話になるが、医学界でも死の研究があるそうだね。

△死の判定や、死んでいく者の心理や看護の問題を、今までなおざりにしていたというわけだ。そして、死を恐れるのは死ぬまえの苦痛と死後とうなるかの不安であって、死そのものは苦痛ではないと言われている。読んだことあるか。

○トルストイの「イワン・イリッチの死」だろう。あの死にぎわの描写はさすが文豪だ。真に迫ってる。看とる者には臨終の苦痛が続くと見えるが、本人は「おい苦痛、お前はどこにいる？ ところで死は、もう死はおしまいだ」と落ち着いている。考えさせる話だ。

△イワンは功成り名遂げた人生の絶頂で死ぬ。運命はそんなものだ。

○死を恐れない人は羨ましい。

△パスカルが言った「死後の世界を信ずるも信じないも・賭だ。どっち道、賭ならあると信じる方が得だ」と。損得の話ではないのだが。

18 リハビリの新しい意味づけ

さる4日、東京コロニーに10年15年勤続された23名の表彰式が葛飾工場の近くで行われた。ひとくちに10年というのは易いが、昔の人も「人生行路難し山に非ず水に非ず」とうたったように、さまざまな困難に堪えて働き通してくれた方がたの誠実のおかげで東コロの今日は築かれている。それを思い、感謝を新たにした。

さて、私は冒頭の挨拶のなかで、次のような感想を、その場に不釣り合いとは感じながら述べたので多少補足して書いておく。というのは、私はかねがね、授産とか、リハビリとか、所得とかに力こぶを入れているのはわかるが、何か腑におちず、もの足りない感があることを否めなかった。

一般にくらべて劣るとも少し仕事にたずさわり、何とか生活が安定すれば足りるのか。そこまで持っていくのが授産であり、リハビリであるのか。それを望みえないような重度障害者にリハビリはないとして、これを除外してよいのか、という疑問があった。

以下にのべることは、私の不勉強を示す恥さらしではあるが、4、5年前から北欧におこり、いまUSAまで動かされているというリハビリテーションの新しい意味づけを上田敏さんから学んだので、その一端をご紹介したいと思う。これはリハビリなんてとうの昔済ませてしまったという社会人になりきっている方たちにも関係なくはない、いや大いにありと私は考えるからである。しばらく耳をかして下さい。

私たちが慣れ親しんでいる言葉にADL、訳して日常生活動作というのがある。リハビリのごく始めの段階で、日常生活に必要な動作、例えば歩く、自分で食事する、手拭をしぼるなどの障害を、少しずつ訓練し、仕事を通して慣らし、補助具を工夫して、職を身につけ、社会人の仲間に入っていき、いわゆる社会復帰への手始めとなる動作をいう。つまりADLはリハビリの基本であって、それにちがいないのだが、リハビリにはそれ以上の目標があるとは考えられなかった。

新しい考え方というのは、ADLも段階として大事なことは変わらないが、ADLを卒業してもしないでも、たとえたきりだとしても、さらに健常者を含めてと言ってもよいが、リハビリの最終の目標は、生きている意味を考えることQuality of Lifeであるという。これをQOLと略し、「生活、人生の質(意味)」と解釈している。

一般には食べるのがせいぜいの世の中のことだから、それほど贅沢は望まないが、結婚もし、レジャーもあって、いろいろ楽しむことができれば、それでいいじゃないか、ということになり易い。

障害をもつ人には、そうでない人にわからない苦しみと闘いがあることだろう。それも職をえて、社会人として生活できれば緩和されましょう。しかし、QOLは障害がある、なし、その程度によらない、人間として生かされている以上、誰にとっても、等しく与えられた生きることへの課題である。

QOLに答えることは、口でいうほど簡単ではあるまい。虎穴に入らねば虎児をえない類かもしれない。一方重度の障害を負い、短命を知らながらQに答えた人もいる。私たちは日常生活の満足に墮することなく、リハビリの高い理想を忘れたくない。先般来問題になっているIL運動も実はQOL運動

からおこったときく。東コロよ汝の車を星につなげ!である。

19 障害者の日

12月10日は35年まえ国連総会が全員一致で世界人権宣言を採択した記念すべき日である。これにちなんで、この前後一週間を人権週間といい、一昨年国連障害者年が行われたのも帰するところは人間みな同等の権利をもち、したがって自由・平等であるという人権宣言につながる。

さらに1975年障害者権利の宣言が出た12月9日を記念し日本は閣議で「障害者の日」ときめたのは意義あることであったが、障害者年が一段落した昨年は何があったか、覚えている人は少ない。

ことは幸い、12月9日に総理府の障害者対策推進本部が主催で「障害者の記念の集い」があった。私は招かれて出てみたら、総理府長官代理のあいさつと田中澄江さんの「障害者ととともに」と題する講演があった。それは実際にあった話ばかりで、胸をうった。少数だけで聴くのは惜しいと思う。あとは「ふれあいのハーモニー」と題するアトラクションで、障害者とボランティアの歌や話や演奏で、もうなれあった同志のおたのしみにすぎない。もっと広く社会に訴える手はないか、翌日の新聞もTVも何も報じていなかった。

この日ゼンコロから熊本の上村所長が障害者運動の功労者のひとりに選ばれ表彰されるときいて、上記の会に出たのだが、式は厚生省内でこじんまり行われたらしい。報道不足を責めたい。

10日と11日の2日間は国際障害者年日本推進全国協議会主催で八三国民会議を長期行動計画推進全国会議として行った。これは政府が国連の方針に従い、今後十年の対策計画をたて、その成果を報告することになっているので、すべてを政府ばかりに任せず民間の自由な立場で、またあらゆる角度からの検討を加えて政府に提案しようとする全国111の団体からなる協議会の行動のひとつで今回で三回目であった。

会議に二つの分科会、「生活保障の確立をめざして」と、「国、地方自治体の法・制度を改善するために」で、私は後者に参加した。長時間の討論でさまざまな意見が出たし、重要でもあったが、私はここでそれらをくわしく紹介するわけにはいかない。

わたしが会議を通して感じたことは、障害者の平等に生きる権利が各方面でどんなに厚い差別の壁に阻まれているか、そしてその事実が会議の場で訴えたり聞いて知るだけにとどまらず、障害のあるなしにかかわらず、広く知らせたり知ることが、先ず第一に大事でないか、ということであった。とかく会議に出た限られた役職者だけの討論の材料で終わってしまわないか。施設で働らく者は仕事に追われて、耳をふさがれていないか、古い言葉をかりれば上意下達、伝達講習の機会なしということか。

わたしはいやに報道不足の話を並べたが、皮肉なことに国民会議の記念シンポジウムは「障害者とマスコミュニケーション」であった。日本人ことに私は弱い。

話変って巻末言も20回、巻頭は気がひける、巻末なら責任負わずとあっさり引き、つけたのが運のつき、編集子に敬老の精神なしとなじると老化防止ですよと親切ごかしの答が返ってくる。たったの1300字と仰るな、一年六回の産みの苦しみはここらでご免と言いたかったが、さて、ピルの八階にこもる身の職場とのコミュニケーションはここが唯一とあってはペンが手から落ちるまでとあきらめた。83年惜別の辞。

20 「福祉の原点は」と問われて

▽社会福祉ときくと何から何まで幸いになる手が打たれているように思われ易い。なぜって憲法に基本的人権が保障されていて、国民は誰もが個人として尊重され、生命はもちろん、自由も、幸福追求に対する——ここで幸福って何かの問題は別として——国民の権利が尊重されるとあるからだ。けれどもよく読むと、個人としてはどんな自由も幸福も願ってよいが、その特権を侵されない不断に努力しなければならないという条件がついている。だが、努力すればどんどん伸びるものか？

▽私などは新憲法が布かれたと言っても、敗戦の直後で誰も中味を教えてくれたわけでもなし、落ちついて読むような生活の余裕もなかったから、「人権」云々を有難がった程度で、特権を濫用してはならぬとか、公共の福祉のために利用する責任があることなどは、いまごろになって知った(憲法第十二條)。

▽そればかりか、国の政治に関わり、法律を作ったりする立場の人は、これらの権利について最大の尊重を払わねばならず、それも公共の福祉に反しない限りというわくがはめられている(同第十三條)。

▽そうになると、公共の福祉や最大の尊重の考え方は、国民の立場と政治屋のそれとは異なるだろうから、社会福祉も聞こえはいいが、制限も後退も朝飯前ということか？ 憲法のこんな解釈はひねくれているか、また、間違っていたらどこが誤りか、ぜひ教えて貰いたい。

▽私も長い医者生活、それも貧乏と縁の深い結核医で通したから、結核医学そのものだけでなく、患者さんがおかれている生活環境、職業や家庭の状況などに気を使わないわけにいかず、社会福祉は、法律や制度だけではざるで水を汲むようなものだという現実がわかってきて、行政に福祉なしとさえ言いたくなった。行政は高い理想があって始めてできるものだが、法律や制度などにはその理想の精神を盛ることができない。社会福祉はなおさらのことで、いくら制度をいじくったとしても、形だけに終るだろう。せめて、これらの運用に携わる人たちの精神に頼らざるをえないのだ。

▽それでは、社会福祉を実現するための肝心かなめの土台になる精神とは何か。私はこう言いたい、「人間が人間に対して人間として向かいあうことだ」と。これはいろいろ説明を要することだが、まず言っておきたいことは、その実行はたいへん難しいこと、しかし、これを目標に実行に努めることが、はなはだ迂遠な廻り道のように感じてそうでないということである。

▽私のこの提案に対して、まず起る疑問、反論は、お互いにみんな人間であるにきまっている、いまさら人間をもち出すに及ぶまいと多くの人はいう、だろう。そこで私は私の人間観を綴らねばならないが、それには余白が足らなくなったから、ひとまず、この稿続くとしてペンをおこう。

▽こんな話をもち出したのは友人のひとりから「人権だ、自由だと言っても八っさん熊さんにわかるように話せないものか」と言われたのと、最近社会福祉を専攻する専門家を前に「社会福祉の原点」と題して話して、つくづく社会福祉ということの難しさを感じたからだ。内容も実行も困難なことを、わかったような顔をして行動している自分をみて、もっともっと掘り下げねばと思ったことだ。

21 「わたし」の不思議

▽警察が事件の犯人を探そうとするときに、現場に残してありそうな指紋をいち早くとろうとする光景はテレビでよくみることだ。私は30年前だが運転免許をもらったとき、まだひき逃げもしていないのに指紋をとられた。いまはどうなのだろうか？

▽最近指紋の話の本をよんで驚いたことには、人間の十本の指に同じ指紋はないばかりか、世界中の人間という人間に同じ指紋はみつからないそうである。似た顔はいくらでもあるが、同じ面相がないのは複雑な遺伝の結果と怪しみもしないでいたが、どうでもよさそうな指先の指紋まで、なぜ造物主は違えて作ったのだろうか？ 偶然とってしまえるのか。

▽自然の現象には、人間の智恵では到底わかりっこないことが沢山ある。昔はそれらを神とか悪霊の仕業としてうやまったり、こわがったりしていたが、今は科学的に説明できて来た。雷さまとよんだ雷が空中の電気現象だとほぼわかったのもその一例である。

▽自然科学の進歩でお月さままで足げにすることができた現代人は、将来わからないものはひとつも無くなるだろうとうぬぼれているが、はたしてそんなものだろうか。

▽早い話が、夏の夜空に美しい天の川(銀河)には千億以上の星が算えられ、宇宙には銀河に似た星の大群が数を知らないとその道の学者はいう。こうなると人間には無限という文字はあっても、その中味を理解する能力はない。同じことが、人間をはじめウィルスのような小さな生物のいのちの本態がまだ実はわからないづくめという。

▽話が廻り道をしてしまったが、私は大事な課題に答える義務があった。それは前回書いた「人間が人間に対して人間として向かいあう」ということ、そこに難しい文字はひとつもないが、ここに人間の日常生活のなかの、いちばん肝心の土台があると言うわけだから、分かったような顔して済ましていては無責任だ。これを井戸端のおかみさんにわかってもらいたいのだが、さて。

▽そこに、人間という文字が三つ出てくるからには、問題は人間とはなにかということになるろう。しかしここで人間は猿から進化したものとする進化論や、人体の構造や生理などの自然現象を論ずる余裕はない。学者がわからないということはかれらの論議にまかせるより仕方がないし、私は誰でもわかることで話を進めよう。早く言えば、人間とはと大上段に構えるまえに、誰もが知っている手近な自分、わたしというものを考えてみたい。「私」は誰の念頭からも四六時中離れない一番卑近のものであって、そんなの知らないと言える人はひとりもない筈である。

▽と言っても、そのわたし、おれ、ぼく、自分、わが輩、それがしなどと言いはいろいろだが、それがからだに中のどこにいるのか、また、どこの部分がそれなのか、誰も知らない。それでもこんなに確実に実在するものはほかにない。死んで灰になればいざ知らず(それでもわたしが宇宙から消え失せるのか、誰も知らないのだが)、生きている限りは手足がなくなろうと視力を失おうと無くならないのが自分である。それは他人という人間、そいつも自分を主張してゆずらず、しかも指紋のように似て非なる存在が存在するという紛れない事実である。

22 夕暮の光

▽『夕暮れになっても光りはある』という表題の新刊書を著者から贈られた。夕闇がせまれば、あたりが真暗くなるのが当たり前なのに、それでも光があるとは、題名からして印象的だが、聞いてみてアッと驚いた。それは素朴で、可愛らしい絵がページごとにあって、絵とマッチした短い文章が下半分に見易い活字で添えであった。これはこども向きの絵本と見まがうが、そうではなかった。副題に「特養寮母の看護絵日記」とある。絵筆をとったのは老練の看護婦さんが定年退職後8年寮母として働いたその間の深い体験が生んだ作品であった。

▽近頃は老人も障害者の仲間に加えられたが東コロの面々にとって、人生の夕暮れはまだ先の先の話である。老人向けの絵本なんか阿呆らしいというだろう。しかし、この絵本をみていて、人間と人間とのほんとは一寸した日常のふれあいの中に、いかに人間らしさがにじみ出ることかを私はみせつけられる。それは年寄りだとか若いとかの違いをのりこえた、人間お互いの間に生じる宝というべきものだろう。

▽とかく難しい言葉や言い廻しで、何か偉そうに見せようとする近代人の馬鹿らしい病癖から私もぬけ出すべきだ。「人間が人間に対して人間らしく向きあう」なんて言い方は、この絵本の単純・簡明さの前に穴あらば入りたい気持ちになる。本当のことほど平明で分かりやすいということ、肝に銘ずべしだ。

▽絵というものがこうも単純で、それでいて、言葉では言い現せない心の深い動きを伝えうるものかに驚く。技巧というものをあまりもてあそばない方が、却って真実を語るのではあるまいか。「文は人なり」といわれたように、「絵も人なり」というべきであろう。文も絵も人間ができていて始めて真実を語り、他者に訴えるのだ。事業も人なり。

▽絵をここに写せないのが残念だが、ほほえましい一文を紹介しよう。題は「お星さまはだれの?」

昼食をゆっくりすませて帰りますと、ひる当番の寮母が四つんばいになって立ちまわっていました。廊下中に散ったお星さまを見つけているのです。

「あらここにも、あそこにも……お星さまをおとした人はだれですか」

熱いおしぼりをもって、ひとりひとりのお尻のよごれをたずねて回るわけにもゆかず、トイレ通いのひんばんな者を探すほかありません。

絵の上方に3人のお年寄りが並んで廊下を歩いている。一様に心配そうな、何か言いたげな渋い表情がよく画かれている。後始末する寮母さんは、それが誰とわかってもとがめはしない。ユーモアある一幅の絵の中に世話する人、される人のあたたかい心の交わりが見える。

▽私の本意が特別養護老人ホームの紹介でないことは分かってくれるだろう。私たちの日々の仕事や暮らしの中で何がいちばん肝心か、そしてひとりひとりが人間らしくふれあうこと、その単純な努力がおのが人生ばかりか関係する事業の真のあるべき目的をも達成させる土台となると、私は言いたいのだ。

▽昨夜の読書会で灰谷さんの作品をよみ人間らしさはやさしさと言えらと思った。

▽頭書の本の共著者がともにらいに生涯を捧げた林文雄先生夫人であることを付記しておこう。

2.3 共働学舎

▽信州は白馬山麓の過疎地に「共働学舎」という福祉施設がある。と言っても、およそ今ではよく見る鉄筋コンクリートのそれではなく、社会福祉六法のどのひとつにも当てはまらず、そのような枠をむしろ度外視して、おのが信ずる福祉の道を歩んでいる、それだからこそ、真の福祉施設と称したい施設である。

そこに私はかねて行ってみたいと願いながら、いまだ果たしえないているのだが、その主張に強い関心をもっているので、創立者がある機会に話した講演などをもとにこれを紹介しておきたい。

共働とは「神が共に働いて下さる」という意味であって、その信念から以下に挙げるような独自の主張と実践力がとが生れてきていると思う。

前々から私たちも障害の種別によって施設を区別することの不当を指摘して、法の改正を願ってきたが、共働学舎の創立者は「分類は人間を差別することの最初である」と言って、始めから福祉法にのっとらなかつた。したがって、ここで働いている人のなかには、いわゆる障害者の範疇に入らない者も少なくない。親たちからは「もう死んだ」「どこかへ行ってしまった」と思われている者、「小さい時から内気でちっとも外へ出たがらない」者、精神障害者、はげしいてんかんなどさまざま、数名の職員を含めて50人ばかりが共同の生活をし、数ヘクタールの田畑を借り、そこで牧畜を含めた農作業に励んでいる。はげむというと可笑しくきこえるが、どんな障害者も何かが出来、興味をもつと自分から精出して働くという。この地は豪雪地帯であるから冬は屋内で、織布なども営み、すべて自給自足を目指している。牛小屋か納屋同然の家で、一汁一菜、機械に頼らず、換金農業に走らず、贅沢はしないが楽しく営々と自ら生きる糧をつくる。これこそ「^{はにゅう}埴生の宿も、わが宿」であり、真実に生きるとなるとういう姿になるのではあるまいか。「国家から金を貰って生きていくということが福祉ではない」「ひとりでは出来ないでも集団となって、労作し、自活していくことが真の生き方」と創立者はいう。

▽人は損得を先にするか、真実を第一に求めるか、両極端の間をどっちつかずで生きている。IYDP以来自立ということがさかんに言われ、ADLの自立から今は経済的をも超えてQOL(生きる質)の自立まで要求されていることは周知である。それは個人の生き方だけの問題でなく、施設の在り方としても要求される。共働学舎をそのまま真似ることは問題としても、ここは他山の石としたい。

福祉国家が看板にする社会福祉なるものは、政治上の損得や誤解のそろばんで割りふられた、税金を主とする公金で賄われている。だから恵まれた者が恵まれない者を援ける慈善とはちがうが、国家が介在して民主的施策のように見えるだけのことだ。これは資本主義国家が資本主義を養護するための上手な術策だと見る人は見る。

無力なわれわれはそうとは知りながら、しないより善いことをしているとして、福祉法というしがらみのなかで泳いでいる。日々の暮らしの安泰こそ望ましく、めったな口出しはつつしみ、福祉の網にかからない無数の弱者のことは見て見ぬふり、知らぬが仏である。

これでよいのか！ わたしたちはみなまだ自立していないのだ！

2 4 管理

▽管理という言葉の流行につられて私もまんぜんと健康管理医でござるときめこんでいたが、少しもの本をかじってみたら、管理はひとすじ縄ではいかないことが分かってきた。管理なんて簡単で全体を統轄すればよいことぐらいに考えていたが、とんでもない。なんと「計画し組織し指導し調整し統制すること」だそうで、私などが片手間にできることではなかった。

▽管理は多数の、しかもいろいろの人間を相手にすることだから、さもあると想像できるが、とくに人間関係の話になると、学者の研究実験が多く行われていて興味津々たるものがある。それは数十年も前のものだが、人間の心理なんて昔も今も変わらないから参考になるだろう。

▽そのなかの1、2を紹介すると、「働く者の行動は感情と切り離しては理解しえない。感情は偽装される。感情の表現はその人の全体の状況に照して始めて理解される」。また「働く者の感情の底に、仕事に精を出しすぎても、怠けすぎてもいけない。仲間の誰かが迷惑するようなことを上長にしゃべってはいけない。あまり他人におせっかいをしてはいけない」などとあった。

▽東京コロニーの場合、オレたちにはそんなことないよ、そんなこといったら人間関係ぶちこわしだよというか、少し当たっているねとうなずくか、それは読む人の心ごころにまかせておこう。

▽経営管理は私など皆目わからないが、健康管理もからだのことならいま常識になってきた。戦争を忘れたおかげで猫も杓子も自分の健康にはやっきで、知識の豊富さは医者も顔負けのこの頃だ。しかしかさま治療法がはやるし、人間関係の複雑さから精神障害がふえた。医学が進歩して死亡率は減っても罹病率が増した。健康管理もままならない。

▽管理という言葉は昔はなかった。世の中が進歩?し、政治も産業も教育も集団で行われるようになったから、管理が登場した。家族と数人の手伝いで農業や商売をしていたころは、品物を扱うように人間が人間を管理するなんて誰も思い及ばなかったろう。管理は誤った文化の鬼子にちがいない。「日出でて作し、日入りて息^いう」といえた昔が偲ばれるが、いまさら昔にかえす術はない。現代文化の欠陥はなにか。それを改める手はないか。

▽ここで文化を論ずる能はないが、すくなくとも私たちの周囲から人間関係を正していきたいものだ。それは波かぜをたてず平和にくらすということではなく、日常生活の中で、自由と平等と人間尊重の具体的な闘いをなおざりにしないことだ。それは何かと市民運動に旗をふることも、現実を正しく認識することが先決だろう。

▽封建政治に馴らされた日本人の多数は馬車馬のように脇を見る眼をおおわれ、働き蜂のようにそれだけ仕事に勤勉であるが、国の政治や団体の運営はあなたまかせで取者の言うなりである。戦後おこった民主主義もいまは名ばかりで、管理もしやすいというものだ。そもそもデモクラシーのデモはビープルひとびとの意味で、その総意でことをはこぶのが政治であり、管理といえるだろう。民という字は目を針でさして盲目にさせた形で、もとの字は眠だという。

民とは知らしむべからずと盲目にさせられ眠らされているものだと皮肉ではないか。日本にデモクラシーが育たないのも理由のないことではない。

2.5 権力への抵抗

▽靖国神社公式参拝に反対する12・7市民集会在中野公会堂で催されたので、私もこれに参加した。忘れもしない43年前の12月8日は、突如として太平洋戦争突入布告があった日、これを覚えている戦争反対の抗議集会であった。私たちはあの戦争で、かつてなかった犠牲を強いられ、敗戦の苦しみをなめたが、それらも平和憲法と国民主権獲得の代価であった。しかし歴史は繰り返す。折角かちえた貴い真珠をいま豚に与える愚をしでかす危機に私たちは臨んでいる。

靖国問題は信教の自由をうたった憲法二十条その他に違反することは、すでに各地で起こった護国神社・忠魂碑・自衛官合祀などの違憲訴訟判決でも明らかであるが、いまや公式参拝を合憲とし、靖国を超国家的軍事施設として、国民を戦争に駆りたてる有効な道具に利用しようとする。日本人には靈魂が死後「神」になって祀られるという民族的宗教心が根強く、「靖国」は似而非なる愛国心の鑄造所となる。

従来の靖国法案は国会で数度否決され、自民党はこれを棚上げして、「閣僚の靖国神社参拝に関する懇談会」という首相の私的諮問機関を設け、からめ手から、「靖国」をなくさず策に出た。その決論は来春だそうで、閣僚の公式参拝合憲は臨教審の急がれる答申と相まって、小中学生の公式靖国参拝、防衛力増強へと軍事国日本への転落が自に見える。世界の障害者数は戦争に因るものが多数を占めている。さらに戦争は社会福祉切り捨てを来たすこと火をみるよりあきらかである。私たちは日々の生活の充実だけを追い求めてよいのか。会場は参加者多数で東コロの仲間には会い損ねた。▽私はつづいて翌8日、韓国のある神学者の急逝を追悼する講演会に出席した。久しぶりに銀座の歩行者天国をかいまみて、まさに豪華日本の表徴をみる思いであった。韓国もおもて向きには日本に追いつけ追いこせの発展ぶりらしいが、強力な国家権力とこれと手をつなぐ資本主義の裏では大多数の国民が真の自由を奪われ圧政に苦しむのは、いずれの国にも共通の現象らしい。とくに韓国はいま重い十字架を負い、正しい主張のために捕囚の苦しみをなめている者が多い。

こうした苦難の中で韓国のキリスト教会はイエスをさらに深く理解する新しい主張がここ十年来始まっている。この日追悼された神学者もその代表的なひとりで、かれらの見解は「民衆の神学」とよばれる。私にはその内容を詳しくする能力はないが、そこに前日の靖国問題と相通じるものが期せずしてであった。それは権力に対する抵抗の重要性である。2千年前のユダヤの国はローマ帝国の属領として民は圧政に苦しんでいた。イエスは虐げられた民衆の中にあつて、神の国待望には苦難に耐えることを教え、行動した。同時に祭司、官憲の不実と闘った。十字架の極刑は反抗に対する刑罰であった。強い者が弱い者を作り出し、これを苦しめることは人間の社会、集団の避け難い運命である。韓国の李王朝、日本の天皇制、その先例は枚挙に暇ない。最近の学校内暴力、小学生間のいじめっこ問題、皆その根は同じだろう。歯には歯をか、右の頬を打つならほかの頬か、ともあれ私たちは権力や真理ならざることに対して無関心、無抵抗であってはならないと思う。

2.6 ゼンコロは何処へ

▽ゼンコロ(全国コロニー)季刊誌に原稿を頼まれて、すぐ胸に浮かんだ題は、「クオヴアディス・ゼ

ンコロ!」であった。よし! これなら書ける、日頃の胸のうちを、とほくそ笑んだのだったが、いざとなると、そうは問屋が卸さなかった。3年越しすったもんだの揚句、めでたく発表に漕ぎつけた「綱領」というもの、出来上ったはまことに結構で、その仕上げに携わった諸公のご苦心は多とするのだが、なぜこうも長くかかったか、そのよって来たる経過を考えると、何かそこにゼンコロの今後を卜する表徴がある。

しかし、表徴の分析と解明は容易ではない。手をつかねたまま原稿のメ切り日が過ぎたのも道理、いつも高みの見物をしているような輩がうっかり口出しする間違いに気付いてよかった。

▽さて、綱領問題はひとまずケリがついてめでたしだが、それは作文にケリがついた感がある。それはそれでよいのだが、ゼンコロ約四千の同士のうち何割がこれに関心をもっているか、いくつかの施設では、全体討議にかけたり、アンケートで意見をきいたりしていたが、総会に集まった一握りの人が議題として論議を交わし、てにをはまで気にする執念が生じてくる。精魂傾けて作文した少数と印刷された綱領を一回だけ読む多数との間には、どうしたってギャップがあり、拳々服膺^{けんけんふくよう}は望むべくもない。こんな悪口を叩くと、折角できた綱領台なしといわれようが、お叱りは甘んじて受けよう。だけど、綱領を生み出さずにおれなかった当初のものふ連の熱気を知る者は時代の移り変わり、コロニーの様変わりを思う。決して過ぎし日を謡歌するだけではないのだが。

▽この頃、街を歩くと、戸毎にと言いたいくらい自につく標語がある。「世界と人類が平和でありますように」と。平和を願うのはよいが、戦後40年繁栄と平和に馴れたわれわれにとって、平和の標語が麻薬となつてはいないか。世界の九割が貧困と飢餓に苦しんでいることを知るか知らずか、わが生活のみの安全と向上のみを願う慢心を助長していないか。

そう思うと、ゼンコロの将来もさることながら、「クオヴァディス・トーコロ!」から手をつけるべきだろう。これも同様に難しい課題だが、要は組織を生かすことではあるまいか。いつも言う事だが「組織が人を殺す」のは組織が大きくなり、年月を重ねると機構が固定化しやすい。職種や担当のちがいから組織は必要だが、組織の弊は自由、平等であるべき人間の、その特権が、窒息し易いところにある。封建制度に慣らされた日本人の血は組織を生かすに、まことに不得手である。盃を交わした形でないとうつぶんが晴れないのは性格のみかは。

思うことを自由に話しあえる雰囲気はどうして生じるのだろう。陰口が好きなのはなぜだろう。もの言って唇が寒いのは秋ばかりではない。

前号には私は権力に対する抵抗のことを書いた。幸いコロニーでははやりの校内暴力の類をきかない。内部告発もない。と言って凡てが平穏で無事、真理と正義がまかり通っているだろうか、見ない、聞かないということは、まったくないということにならない。

ここにきて巻末言は裏口でこそそそ喋ってるような気がしてきた。そろそろ巻頭言に改めようか、思案中。

27 話し合いの難しさ

▽臨教審の第一次報告があつて、委員のひとりがNHKのアナウンサーに話す、「追いつけ追い越せの時代はもう終つてよい。画一主義の教育では大事な個性を失ってしまう」と。私の小学校時代は図面

の教科書というものがあって、手本の通りに描けといわれ、まさに物真似であり、個性なんでものはあってならないものであった。これは明治の話であるが、おかげで私は中学で「写生」となると、どう描いてよいかわからず、いまもって私が描く絵は3歳児と紛うことになった。没個性の教育の弊を救う手は早く実践してもらいたい。

▽さる工場で、各部課ごとの10人ぐらいと月一回でも話し合おうという計画が、4月からレールにのった。工場内を月一回お役目としてひとまわりしたくらいでは、みなさんの百字すら覚えられないのは老化のせいとしても、顔色ひとつ伺えない。それよりは、お互い人間なのだから、話し合いの席を設けたら、というのはその所の所長の企画の主旨であった。ところが、たびたび話し合いの必要を言った私だったが、話し合いのむずかしさをつくづく味わった。第一、こっちがはだかになるつもりでも、ふだんがものを言ってお互いが井戸端のようなきらくさになれないのは、あながちお茶菓子が足りなかったためとも言えない。

▽私たちは自分を語ることに甚だ不得手だ。うわさ話はまことしやかに、尾ひれまでつけて治々としてしゃべるが、さて自分の考えとか主張とかになると、全くだめだ。それというのも、殻にはまった教育制度のなかで、個性を伸ばそうとする芽を早くから摘まれてしまったからであろう。

人間に個性が著しいのは、世界中に同じ人間はひとりもない証拠であって、個人の存在の意味の重さを語っている。「私なんていてもいないでも同じ」という声をよくきくが、自分を侮辱することになりかねない。

▽もうひとつ、長年の封建政治は、私たちが公事や政治に口を出さず、自分、身うち、町内といった狭い範囲の平穩無事を専ら願う利己的な生活態度を性格的に作りあげた。万事をえらいお方に預けて、滅多に意見を吐かない処世術を身につけた観がある。

▽始めたばかりの話し合いに大きな期待をかけてはなるまい。10人ずつとして年に一回では、慣れるまでも時間がかかる。それに「裸」とは口では言っても「まるごとの表現」ができない以上は、しかし、しないよりはまし、気長く続けたい。

どこの職場にもいろんな問題があり、意見もあるにちがいない。東コロにも、ゼンコロにも。「どれも難しい話だ、言ったって、黙っていたって同じことよ、いまに何とかなるさ、任せておこうよ」、そう言っていたのでは、本当の進歩はない。たとえ百家争鳴の経過を踏んでも、障害者問題の本質を衝く論議こそ、形の上の事業の発展よりもっと大事なことはないのかと私は考える。これも迂遠のようであっても、ひとりひとりの自他の個性を大切にすることが、最後の勝利をうる道であろう。

▽ついですが、敗戦後民主主義が強く叫ばれ、私など会議のもち方など訓練を、つけたものだ。10人集まれば10の意見があってよし、その一つでも無視されてはならない、それが民主主義である。多数決という割り切り方は結末をつけるための便法にすぎないということ。

28 フランス、ドイツへの旅

▽半月の休暇をもらって、フランス、東・西ドイツへの旅に出た。あちらこちらに迷惑をかけるとは百もわかっていたが、こんな機会はまたと得られないと思いきった。シュワイツァーの故郷アルザスで毎年一回聞かれる集談会へ招かれたからで、かねて、一度はと願っていたことだった。またシュワ

イツァーに関して日頃抱いていた疑問のいくつかを質したい願いもあった。

○会議はわずか1日半であったが、仏・独・英・和・瑞西・波蘭などから20数名が集まり和気あいあいの話し合いであったが、未熟な外国語で、これを聴き、考え、話すことのもどかしさは、この齢になって嘆いてもはじまらなかった。

▽会議のあと、在独の友人にレンタカーを運転してもらって、宿望の地を毎日駆け巡った。観光ではなく、シュワイツァーゆかりの地はもとより、アルザスが生んだ教育家オペリン、敬虔派の祖シュペーナー、南ドイツの宗教家ブルームハルトなどの遺跡を訪ねた。最後に長駆東独へ、聴きしにまさる嚴重な検問をくぐって鉄のひカーテンをこえた。思想・主義のちがいが同じ人間、ひとつ民族をこんなにも分け隔てる政治とは何かを問いたい。東ベルリンからドレスデンに進み、東独シュワイツァー委員会の歓待をうけた。最後はゲーテの旧跡ワイマールにシュワイツァー記念館とシュワイツァー像を尋ね、アイゼナッハのワルトブルグ城にルーテルが聖書をドイツ語に翻訳した小部屋で400年の昔を偲んだ。

▽東独の最初の印象はアウトバーンの舗装のまずさ、これは技術の差ではなく、苦しい経済事情であろう。西独では150キロ、ときに170キロをとばしたが、東ではしばしば100キロで車がガタガタ鳴った。第二は交通標識の乏しさ。わずか2日の滞在であったが、西にくらべて国全体に暗さを感じた。それは色彩だけのことではない。

▽しかし、かつて東のパリと謳われたドレスデンのとくに中心街は観光誘致の目的もあってか、有名な古い建造物がまったく戦前の姿に復興されていた。屋上に並ぶ多数の彫像など烈しい爆撃を予想して早く疎開してあった由だが、由緒ある往時をそのままの姿に再現しようとする精神と技能に私は感嘆した。ドレスデンはとくに戦災がひどかった都市で、今も鉄骨と煉瓦の山をそのままに残した記念碑が戦争の惨禍を語って好対照であった。

▽復興の精神とは歴史を過去のものとして遣すだけでなく、過去の尊い精神を現在、未来にも生かそうとするところであるべきだろう。真実は未来にだけあるのではない。形は変わっても過去の生きた精神は尊び守りたいものである。私の感想を上手に表現できないが、そこに日本人の歴史観との相違を思わざるをえなかった。

▽十年もたつと軒並みに家があたらしくなって、町の様子が一変する日本はいずれも木造の兎小屋だから止むなしとばかりは言えない。何もかも残しておくべしとは言わないが、新しいものを追うだけが能ではあるまい。古いものにも棄て難いよさがある。とくに長い歴史が育てた精神文化をないがしろにしてはなるまい。

▽文字通りに日進月歩の機械文明に惑わされて、私たちは新しいものとびつきたがる。たたみと何とかは新しいほどよいという。機械などはそれにちがいないが、真の文化は長い歴史が築きあげたことを考えたい。コロニーの歴史は浅いが、貴いものが在るはずだ。

29 第三世界の飢餓の原因は？

▽金沢大学に所用があって、何十年ぶりかで国鉄北陸線に乗った。いまさら言うのもおかしいが、戦前の裏日本というイメージとはうって変わって、いたるところの繁栄ぶり、自然を別にすればなにも

かも過剰の一語に尽きる。変わらないのは私をふくめて、ひとを押しつけても座席をとろうとする根性だ。ほかのことは上品に振るまってもうわべにすぎない。この気持ちが改まらない限り、受験地獄の解決も世界平和の到来も遠い夢と、恥ずかしく思った。

▽たまたま車中、ある人の中近東旅行記を読み、現地の悲惨極まる食糧事情が目にとまった。「ある喫茶店でコーヒーを飲んだ。恐らく中南米かアフリカの農場でつくられた豆だろう。彼らは雀の涙の給料で、炎天下汗水流して、われわれヨソ者のための嗜好品をつくっている。われわれの嗜好品の総和が間接的な形で第三世界の人々を苦しめている。と言っても飲まなければ、かれらは外貨獲得の途を失うだろう」と。私も飲むべきか、飲まざるべきか？

▽私はさっそく「なぜ世界の半分が飢えるのか」の一本を購めた。ページをくるほどに私は眼を聞かれた。世界人口の三分の一が食糧不足に悩み、「6時間に2500人が飢えか、これに関連した病気で死んでいる」深刻な事実を知っていたが、その原因についてはまったく誤解していたのであった。第三世界の飢餓は決して人口過剰や天候異変だけによらない。世界の食糧を操って第三国に食糧不足と飢餓をつくり出している元凶は実は多国籍食品産業と政治だということであった。週一回夕食をとらずその分だけ献金するなどの小さな善意も悪くはないが、そんなことで解決するような、なまやさしい問題ではなかった。世界の資源には限界があり、世界は人口過剰で食糧不足をきたす。とくに貧しい国ほど出生率が高く、食糧資源を最も多く消費する。だから家族計画が急務だとよく聞かされて、私はその通り信じていた。事実、東南アジアを旅すると、家族計画の宣伝ピラが到るところで自につくものだ。

「人口の上では全世界の六%にすぎないアメリカが、全世界資・源の約35%を消費しているという。わが国もそれに近い消費国である。それというのも、企業や政治家にとって現地人の飢餓よりも、技術と機械を投じて大量生産した食糧を裕福な国民に多量に消費して貰う利得優先に走るのは理の当然でないか！ これらの事実を紹介すれば際限がない。多国籍企業の進出は広大な土地を占有して大量生産を目指し、現地の住民はおのれの食糧をつくる土地をうるさえ、ままならない。大規模な災害や飢餓のニュースが伝わると義損、救済の名目で多額の金品を贈る政府の行動は、隣家の火事見舞いなどと違って、政治的権力という紐つきときく。

恐ろしいことではないか。

▽では解決策はないか？これはまた意外な答えを私は教えられた。曰く、「第三世界の人びとを放っておきなさい。手出しはやめなさい。他人のことに立ち入ってはいけない。……自分の都合にあわせて相手の環境を変えるのはやめなさい」と簡単である。私たちは上のもの、権力あるものにまかせ易い。これは世界の食糧だけの問題ではない。日常生活上の大事な指針であろう。もっと書きたかったが余白がつかた。(この稿朝日選書257に拠る)

30 人間回復のとりで

▽「人間回復のとりで」と題して、コロニー物語が、NHK出版部から近く出版される。出来上るまでに、ずいぶん時間がかかっただけにコロニーの闘いの跡も興味深くよめる。といて、むかし昔…あったとき式に読まれたら惜しい。コロニー草創のころは、白衣の戦傷者だけがはばをきかし、駅前に

座りこんだり、国電の中で車掌にかくれて募金を訴えたり、したものだった。そんな時代に、結核療養所からトコロテンのように押し出されてくる結核の中途はんばな回復者のため、住と職を求めて立ち上ったのがコロニーの面々であった。それは決して乞食根性ではなくて、人間の生きる権利と平等を主張する闘いであった。とくに先頭に立って旗を振り、汗と涙を流した何人かのサムライやこれといっしょに闘った仲間たちはほんとうに死にもの狂いであった。犠牲者も出た。それは社会の矛盾に対する止むに止まれぬ抵抗であった。いま、どこかにとりでがあるか？

▽最近のこと、コロニーのある工場で、地域の文化団体に属していた数人の仲間が、その企画された演劇のセリフに身障者を差別するものがあるとして、堂々抗議を申入れたときいて、私は少し溜飲がさがった。

▽先日、朝日新聞社が女性問題で国際シンポジウムを催した。その席で差別問題を論じたある学者が「生産優位の社会は差別をつくる」と言った由、一友人が教えてくれた。さっそく古新聞からその記事を探し出して、読んだ。

「男女雇用機会均等法が採択されて機会は均等にされても、エリートとマスの新しい差別が生れる」と鋭い指摘をしている。能率主義、生産第一、知識偏重の社会から差別が無くなる日はあるまい。ますます倍加するのではないか、人為的に男女の差別をなくすことにも限界がある。むしろわれわれはなぜ運命に差別が存在するのか、という根本的な問題に目を転じ、想いをひそむべきでないか。人工的差別と天与の差別、その意義は、天と地のように遠いのでないか。

▽八王子自立ホームを訪ねる。サボるにもほどがある。開所一年目の開所式に招かれてから3年余りすぎた。改むるに偉ること勿れと勇を鼓して行ったらみんなして待っていてくれて、2時間半話したり見たり、やっとな胸を撫でおろす。

▽東京コロニーの本陣は着々その目的のひとつを果しつつあるか？ と思うが、障害者問題は八王子ホームで、いまとぐるをまいている。未解決な困難、具体的な、さらに形而上のそれを抱えて闘っている。容易な問題ではないが誰かが闘わねばならない必須のことだ。東京コロニーを扇子に警えればこれはその要であろうか。私に手助けする能はないが声援だけは送ろう。口の悪い連中がいう「理事長のどき回り」をこれからは工場七つにふやして、せめて形だけでも責めをともに負いたいと思う。遅きに過ぎた。

▽ひと口に障害者問題といっても関連する問題は広く、誰からと言わず、これを提起し、矛盾を追求し、解決を求めたい。それはいまという時代、一層多様になるだろう。しかし、まだまだ、かくされて質がちがう問題がある。障害の軽重を問わず、障害を負った体験だけが胸の底から訴えるもの。わたしは健常者がその秘められた声に静かに耳を傾けねばならないと思う。忙しい生活の中でその声はきこえてこない。永遠的なものほど見えず聞けないものなのか？

3 1 白書・たてまえと本音

▽白書というものはやる。私は白は白状の白の意味で、なにもかも隠しだてをせず、ありのままに言ってしまうことだろうと、勝手な解釈をしてすましてきたが、まんざら、そうとばかりは言えないようだ。モノの本をみると、白書というのは政府がコトの実態や方針を国民に知らせる建て前の文書

で、イギリス政府が外交の内容を国民に知らせるその表紙が白色であることから、白書というだけのことだった。(日本では昭和22年片山内閣の経済白書がはじまり)。道理で眉唾ものとさとした。▽60年度厚生白書が出た。今までの老年を長寿と改めたのは中曾根さんの発案ときくが、ものは言いよう、さすがである。長寿という方が文字を考えただけで老年より明るい感じがするが、そこは手品のようなものだ。本音は、社会保障費のやりくりがつかなくなると先を見込んで、民間活力とか、私的サービスとか、国民をおだてておいて、何のことはない、国民負担をお願いしますよということだ。一事が万事、だまされてはなるまいぞ、社会福祉切りすての方向がみえすいてきた。一般の景気も下り坂とか。冬の構えを怠るまい。

▽ここまで書いてきて気がついたことは年の瀬まで約1ヵ月もあるのに「あけまして新年おめでとう」と書かねばならない新年号の原稿になるのだった。ころにもないめでたさを書く、それがいまの世の中さ、と言われてしまえばそれまでだが、それなら、本音と建て前を使いわける白書になってしまう。巻末言だけは白書とはするまい。いや、生活、言動、すべて本音だけで生きたいと思う。

▽建て前を棄て、本音だけを貫く、これを一年の計としようかと思ったとたん、これもまた私の三日坊主か!と思いかえした。思えば長い年月、建て前だけで生きて来たわたし、教育問題たけなわのこの頃だが、私なぞ小学校以来教えられたあの作文という奴、あれがそもそも建て前教育ではなかったのか。自分の気持や考えを誤りなくわかってもらえるように書くよりも、文(あや)を作ることに腐心したもだった。心情吐露なんて見向きもされなかった。

建て前とは、もともとむねあげの意味で、家の骨組みが立ち上った喜びを祝ったりしたものだが、それが建てる前の方針の意に転じ、だんだん口先きだけの方針になってしまったのは、人情がそうさせたのだというほかあるまい。

▽人情といえ、私自身ものごころついてこの方、人情のしがらみのあいだをくぐり抜け通してきたと言わざるをえない。堂々自分の所信を貫くだけの勇氣も信念もなかった。老いの愚痴になるが、長寿も省みれば何のためだったか、過ぎた年月をとり返すすべはないのに。本音を語り、本音を実践することの難しさ、常識といわれる世のなかの知恵になずみ、人まえをととのえている限り、見かけは平穩無事だろう。しかし、そこに何の生き甲斐を感じえようか。たたかいのないところに人生があるだろうか。

▽次代を荷なう若い世代にお願いしたい。本音必ずしも真理とは言えないが、ほんとうのこと、間違いないことを本音として生きて下さい。たてまえなんか蹴とばして下さい。それが若さというものでしょう。

この年末言が年頭言となる、それもまたよいでしょう。

32 「障ガイ」

▽自立連(正しくは全国障害者自立確立連絡会)の機関誌第2号、本年1月15日発行の「碍」を読んだ。書き慣れて意に介しなかった障害者の害という文字は、害虫・害毒・公害などに用いられるように、「あってならないもの」の意味に使われているから、障ガイ者のイメージを誤まる。そういうわけで、「さまたげる」意味の碍に改めてはどうか、という意見はIYDPが始まったところから言われてい

た。昨年から自立連が機関誌の名にこの一字を採って、「ガイ」と称したのはキャンペーンとして賛成しよう。われわれも今後障害者と書き改めてはどうか。

▽但し、自立連は発音が似ているからであろう、わざわざ GUY という英字を並記したのは腑に落ちない。GUY には「滑稽な服装の人、だらしのない風をした人」などの意味もあるから、蔑視ととられないか。外人は何と感じるか、きいてみたい。

▽もうひとつケチをつけると、碍は新しい漢和辞典には無く、あっても擬の俗字とある。枝葉末節のことだが気がかかる。日本人の横文字礼賛にならわず、堂々 GAI で通してはどうか。

▽さて「碍」を読ませてもらったの、私のいちばんの感謝は、私なんか、障害者の心情のシの字も知らなかったということを知ったことであつた。いまさら私の素性を言っても始まらないが、コロニーそのものにも、同じ傾向が無いとは言えない。

▽私は結核がはなやかだった時代に、結核療養所に患者が溢れて、治りきらないうちに、トコロテン式に退院させられ、職も住もない人たちが、やむなくいまはやりの自立の精神から造りあげたコロニー運動に結核医として関係したのがはじまりで、従って私は結核回復者という中途障ガイ者だけのことしか知らなかった。

▽結核回復者の一部を内部障ガイ者として身障福祉法で扱うよう厚生省を動かしたのは周知のようにゼンコロであつたが、それが功を奏して以来、コロニーは身障授産施設として発展した。私はいつから障ガイ者全般にかかわり出したか、はっきり覚えませんが、そもそもの出発がこのようだったから、障ガイ者の、とくに幼い時から障ガイを負って生活してきた人たちを知る機会なしに過ぎてきた。

▽障ガイのシの字も知らない話から長々と障ガイ者とのかかわりの経緯を書いてしまったが、言いわけがましいことを言ったって何にもならない。これからは少しでも自分の無知を反省して、取り残された障ガイ者問題を知ることだ。敢えていえば、それは私だけの欠陥でなくて、コロニー全体の課題ではないか、と言いたい。

▽障ガイ者対策の課題は山ほどある。どのひとつも容易ならないこと、とくに最近の政治・社会情勢を思うと范洋の感だ。誰もが全力あげて闘っていることを疑わないし、問題の軽重を論ずる暇もないが、私に、またコロニーに、そして各々に課せられた第一の問題は何か、じっくり考えたい時だ。

▽中途障ガイ者と生来のそれとの比、その中でも重度者の数は調査も難しいだろうけれど、おそらく生来の重度者は多くはないだろうが、決してすくなくもないだろう。政治や社会からとかく忘れがちな少数者の福祉を置き去りにしては福祉問題は終らない。私は「碍」からこのことを示唆されたと思う。時すでにおそしの感に堪えないけれど。

33 「トーコロ」11年

▽さる3月までで東京コロニーの部内報「トーコロ」が満11年つづいた。葛飾、東村山、大田と急に3施設が離ればなれに出来たので、「ひとつ東コロ」の連帯感をもちたいと始めた「トーコロ」だ。どこまでその役割を果しえたのだろうか。

▽当初は月刊であつたが、5、6回で息切れがしたらしい。そのあと年2回やっただったり、出ない年もあつた。これでは部内報の意味を成さないと小言を呈したら、5年前から季刊が守られている。

編集陣ご苦労さまである。

▽編集陣といえば、早いころ一回だけ陣容が誌上にのった。その後入れ替っているはずだが匿名のままつづいている。匿名も時と場所によって許されるし、頭文字でもよいが、人の名は動物の愛称とちがう。人の名は人間が個として存在する意味と、それに伴う責任を示す。ああ、あの仁が書いているのか、と知って読むのと、どこの誰がいうことか、と目を通すだけとでは、一言半句といっても味も重みもちがう。人間ってお互いそういう存在だろう。障という数にかくれず、個を大切にすて貰いたい。

▽昔のトーコロ誌を繰ると、個人の寄稿が目につく。お役目で書かされたものもあるが、投書もある。事業は人なりというからには人事異動の報告も欠かせないが、数が多くなると人をもの扱いにしがち、事業は物なり数なりと言いたげだ。投書がないのは忙しくて人が物となり、個が薄れたと見る。

▽新入社員の紹介はなかなかよい。しかし、「私はどこのたれ兵衛で、生れはどこ、趣味はなに…どうぞよろしく」と言ったきり、あとはウンともスンともいわず、その名が退職者欄に並ぶだけでは淋しい。せめてご苦労さまでしたと言って送りたい。これも数が人物と誤らせる徴だ。

▽そうかと思うと、どこからともなく、東コロの将来はどうなるかという声もきこえてくる。何かにつけて不安を覚えるのは有為転変は世の習いというから無理もない。それは東コロを真剣に考えている証拠だから、有難いと礼を言うべきことだろう。

▽そこでひとこと言わして貰えば、誰かの意見をきくのも結構だが、同時にあなたの意見を書いたり、どこはよい、どこが悪いとはっきり言うことも大事だろう。個々の意見は未熟でも、互いにああでもない、こうでもないと言い合っているうちに、よい方向が定まってくるのでないか。切磋琢磨ということだろう。だがそれは井戸端会議とちがい勇気が要ること、それはまた民主主義が育つ畑でもある。大御所の仰せをきいてそれを金科玉條と従ったのは昔のなら이다。難しい世の中になったし、どこの大統領や閣僚だって間違ふこの頃、幸い今は民主主義のご時勢だ。個を育てようではないか。

▽私は時どき筆禍事件を招く。事件というほどにならないのは、私に遠慮したり、私を萎縮させまいと大目にみってくれるからだろう。しかし反対意見が耳に入らないのは私にとって却って「禍」ではあるまいか。私はむしろ叱責を待っているが、それでも私は思った通りに書きたい。個が衆の中に埋もれてしまわないようにだ。

▽トーコロ誌の話から筆がすべった嫌いもあろうが、私が何を言いたいかは分って頂けるだろう。どうか自他ともに個を大事にしよう。井戸端もいいが、大胆に大声で自分の考えをのべよう。よく生きるには量より質が大事だ。

3 4 こっちが話せば向こうも話す

▽赤子、あかごと読めば生れたばかりの児、セキシとよめば天皇からみた臣民、指一本でひねり殺せるあかどのように「死は鴻毛より軽い」と赤紙一枚で戦争に狩り出され、赤色が表徴する忠誠を強要された戦前を思いだす。

▽その反動であろう、戦後、にわか人間という言葉がはやり、猫も杓子も人間云々した。恐らく、

国連の人権宣言に刺戟されて、個人の権利、地球より重い人間ひとりの価値を意識しての流行だったろう。私もこの言葉をよく使う。

▽しかし、文字は便利なようで不便なもの、昔のように人間をジンカンと読む人はすくなく、河上肇が昭和19年に漢詩でジンカンとよませ、「人の世」と解しているくらいだ。これにニンゲンと振仮名つけても、書く人と読む者と同じ意に解するとは限るまい。岩波国語辞典でみると1「われわれがそれであるところ」の人。イ「人類」。ロ「人がら」「人物」。2「もと、人が住むところ、世の中」などとある。カッコした「われわれがそれであるところの」という但し書きもよく分らない。人間くらいよくわからないものは実はないのだ。

▽前置きが長くなったが、私は最近ある会合で数人を前にして私を語る機会をもった。幸い、真剣に話し本気で聴いてくれる雰囲気だったので、用意はなかったが、思いつくまま十数分話した。それでも私というものの何十分の一も話していない不満が残った。時間も足らなかったし、もっと話したいことがあったが、私はよい印象を受け、あと味が良かった。そのわけは、話は部分的だったとしても、互いに真実に話しあえたということ、だったろう。いまの時代、いまのような仕事の中で、こうした機会をもっと多くもちたい。それを妨げているのは、仕事魔がもたらす忙しさに違いない。

▽話は飛ぶが、病人を診るとき、医者には警察官の尋問のように都々逸さながら、どうして、どこで、どこが、いつ？ とたずね病人の顔をみる時間も惜しむように、カルテと向きあっている。三分待って3分診察は医者を作りすぎた今日でも変わらず、これで本当の診療は出来っこない。病人は犯人ではない。正しい診断、治療は病人の日常生活から、その人生観まで知るくらいに病人と医者とのコミュニケーションが成りたたねば駄目で、それには医者も自己を語ることから始めよと私は私の先生から教えられた。なかなか実行できないが、それが本当だと思う。

▽医者と病人の話なんてトーコロと関係ないと言われそうだが、私が言いたいことは、人間同士の話し合いは、こっちが話せば向うも話すという原理である。こっちが冗談を言えば相手も冗談を言い返す。こっちが腹を割って語れば先方も滅多に話さぬ秘密も洩らす、人間とはそういうものだ。話が一部であろうと、整っていないであろうと、少しも関係ない。心の琴線が共鳴するか、どうかである。

▽われわれがそれであるところの人間というものの真の姿を少しでもよく知り、行動することは容易でないが、お互いの心の深いところで話し合うことは、日頃の仕事を進めるうえでも大事なことでないか。人間はロボットでない。器械のように動き、仕事の成果をあげることだけが人生の理想とは誰も思っていないのだが、なぜ人間はそうした課題の大小優劣をとりちがえてしまうのだろうか。日常の仕事を追いかけて紛らしている方がらくだからであろうか。

35 世代交替

▽「トーコロ」が生れてから11年6ヵ月たち、第50号が出る。もう50というか、やっと50というか、よく続いたと思う。世間にははじめ脱兎のごとく、やがて3号ぐらいでそれきりになる例が多いことだから、編集陣の労を多としよう。

▽数をかぞえるのは人間だけがもつ本能で、計数の知恵が自然科学の基であったことを思うと、数は尊重したいと思う。しかし、動物は自分が産んだ子の数をすらかぞえることを知らない。自然界は星

を筆頭に無数が建て前らしく、天文学者も手をこまねく。してみるとスポーツで何分の一秒を競うのは可笑しくないか。雑誌も事業も数より質を評価すべきであるまいか。

▽「巻末言をいちばん先に読みますよ」なんて声を耳にすると、こっちはおめでたくも好い気になって、回を重ねてきた。書くというより作ったという方が当たっているだろう。時間もかかるし、ラクじゃない。もう御免だと何度か訴えたが、懇請と惰性に負けて今日になった。

▽そんなとき、ゆくりなく、数日後に迫った日本社会党委員長選の、上田・土井両氏の白熱したテレビ対談が目にとまり、思わず引きこまれた。若年層の社会党離れ、高齢化した中央執行部の若返りなどが大胆に指摘された。いまの若者には戦中・戦後の感覚がないとの発言は、私にはショック、そういう時代を改めて認識せざるをえず、ひとりよがりの私の明治調に若者からの反応がないのも当然とわかった。党の性格や方針についても、誰でも分る言葉で語ることが、若者が協力してくる具体的な改革策だと言う。どれもこれも他山の石である。

▽宇宙は森羅万象が回転している。地球だって無意味に太陽を廻って四季を繰り返しているのであるまい。加齢が生物の自然現象なら、世代交替も自然の理に適う。それが現実にはむずかしいのは、誰が、いつ、どう代るかで、そこで定年制が生れたのであろうが、これとて規程通りにはなかなかいかない。要は自分で決める能力をみがくことだろう。そういう私こそ無能のお手本であった。マッカーサーは米政府との意見の相違から国連軍最高司令官の職を辞したが、「老兵は去る」とうまい言葉を残してくれた。大事なことは言葉より決心であった。

▽自民党の圧勝は日本の将来に暗い影を投げ始めた。早い話が、社会福祉の問題にしても、「費用徴収」ではっきり予測できる。決してこれだけで終らず、時代はもっと深刻化するであろう。これにどう対処していくか、私たちは時代の流れを早く賢く洞察し、具体的に間違った方向を正さねばならない。その明知と力とは若いのちに期待するより他ない。年配者が自負する体験はもう新しい時代にそぐわない。経験は貴重だが、過去の経験を固定化した、いわゆる体験を後生大事にする熟年者の愚は退けねばなるまい。

▽ここでひとこと言っておきたい。今日のような科学・技術の進歩には誰も圧倒されるが、合理合理が行きすぎて、人間関係までゴリゴリとうるおいのないものになっては困る。合理主義は精神的公害だと言われるが、その公害のひとつにマイホーム主義がある。自分さえよければ万事よしで、他をかえりみなくなる。本当の個人主義は個を大切にするとともに、全体をよくするものでありたい。若い人に注文したいのはこれだけだ。

36 終りを自覚しつつ

▽「人のすることには万事終りがある」という、ごく切り切った考えが、私には生活のモットーのようにこびりついている。それがいつ頃から固まってしまったものか、自分にもはっきりしないが、若いころから長く結核をわずらって、いつも「あと五年生きる?」ときめていたことや、結核医としての長い仕事なども無縁ではなかったであろう。敗戦前後の結核患者の病状は悲惨そのもので、よろず不足のなかで、ばたばた死んでいったと言っても過言ではなく、死は実にあっけなく、造作ないことを知った。医者も頼られ甲斐なく、手を拱いて成り行きにまかすほかなかった。私もあの人たちを死

ぬ前の心身の苦しみから救い出したいと心ははやったが、宿命とあくまで闘う強気はもてなかった。▽人の一生は死をもってすべてひとしく終りを告げる運命の厳しさを、私は生活を通して、ひとときも忘れられない人間になっていた。多くの人がそれを知らないかのように日々の行事にうちこんでいる姿がふしぎに思えた。考えても詮ないことは避けるか、ごまかすかが賢いと言わんばかりに、死の片鱗をものぞかせない。もっとも精一杯今を生きるが大事で、終りを気にしていたのでは仕事にはならないし、「人間到る処に青山あり」といった古人の意気もわかる。私のように消極的になっても困るが。

▽事業所の多くに定年制がある。それには利害得失があるが、必要悪だとして、いまは論じないが、これによって終身雇用制でも終りを自覚せざるをえないことは善い。

▽働けるのもあと何年と指折り数えて年金と老後の設計を考える人も多いが、働き始めたころは働きたくて働いたはずだ。そしていま何を目的に働いているのか? 「習い性となる」というが、性は本性の意味だ。もし機械のように動いていると、人間らしく考えたりしない機械になると言える。勤続何年表彰も、言えば、ロボット表彰になりかねない。そうなっては断じてならない。はたらくことが、漢字「働」のように単に動くことなら将来ロボットが人間より精巧に、忠実に、休みなく動いてくれるだろう。人間が働くのは、それを通して人間をつくるのだ。リハビリもいまやQOL(生活の質)を目標とするまでに変わった。障害あるなしにかかわらず、自立、自律、QOLを考えようではないか。死と定年制とは期限つきでこれを促している。

▽私はあと5年? を繰り返しているうちに86年を生きた。この間に辞めた仕事も十指に余る。飽きて止めたり、やめさせられたことはない。一回だけ上司と意見が合わず退職した。地位に恋々としたこともない。人間、長という職につくと、始め責任の重きを覚えるが、座り心地も悪くなく、えてして長居しやすい。自己批判はむずかしいから遅れがちになる。私は無能が幸いして、仕事の責任を果していない、いわゆるこう曠職こうしやくの自責に追われる。背伸びばかりしているのは、まことに辛いものだ。

▽今日の新聞は国民の意識調査で生活一応満足が七割という。東京コロニーはどうだろう。欲はきりがなく、足るを知るはいつのこと、また、何をもって足るとするか、余暇か、所得か、住まいか。QOLのQを何と考えようか。東京コロニーの形は続いても、魂を失いたくない。それこそがみんなの責任でなかろうか。こんなことを瞬く明治を遠くになりけりというか。

37 引退のとき

新年おめでとう!

繰り返し、おめでとうと言ってみるけれど、本当におめでたいと喜んでよいのかと、つむじ曲りは考える。言うならば「ことしこそめでたい年になるように、今日から努力しましょうや」と、堅く握手でもしたら、まだ心が通うと思う。めでたきは、ぼた餅が棚から自然とおちてくると、待つにしては私は年をとりすぎました。

▽先号のこの欄では私の引退をにおわすに留めたが、一部の方は早くからご存知であった。私としては1年も前から、さる11月の役員改選で満願成就と期待していたのに、後任者の諾否にはなお四、

五ヵ月かかる事情があったため、当てがはずれて、願いは宙ぶらりんになってしまった。気抜きのパトタッチは居心地がよくありません。しばらくの繋ぎ役、よろしく願います。

▽こんどの役員改選で東コロ理事の若返りが少し叶ったことはうれしい。世代交替のよさは何か？若さを歓迎するのはなぜか。若さには青臭い、未熟だ、若気の至り、など非難めいた見方もあるが、齢をとると反対に固陋に傾き、保身の術に長けてくる。どっちもどっちだが、若さがなければ期待できないものがある。ほんとうのことを、ほんとうと見分ける感受性、それをはっきり言い、実行せずにおれない勇氣、これがわけても若さのもつ価値ではないか。それは必ずしも、年齢にかかわりないかも知れないが、齢は争えないものだろう。理事者だけが若返っても、どうにもならない。このさい、みんなして、本当のものを求め、語り、追求し、ごまかしや、間違いを摘発したいものだ。

▽先夜、東村山コロニーのカルチャースクールに招かれて、高橋竹山の津軽三味線に聴き惚れた。昔から「一芸の士もって談ずべし」というが、一芸に徹すれば、老いも若さもあつたものでない。年の功でもない。真実を求めて到達した至境とでも言うべきか、私は適当な言葉を知らない。私自身は文字通りの音痴をもって任じているが、日本の音楽の音色の美しさは、西洋音楽のそれとは比べようもなく美しいと感じた。私は沖縄で隣家から聞えてくる三味線を聴きながらもそう思った。私が西洋音楽に親しめないのは、野暮であるより日本人だからだと、勝手に意を強くした。

▽いろいろの役職をみんな引退しようと交渉を始めたが、遅々として埒があかない。東コロも27年間の浅からぬ因縁だから無理もないと言うべきか。能もないのに背伸びばかりし、その上追いかけられるように立ち廻っていた生活に愛想がついた。無責任もきわまる。月給泥棒でないか。齢を考えてみると、どこからともなく声がする。

▽「何もかも辞めて、一体なにをしたいんですか」と出し抜けに問われて、咄嗟に答えた「私は気ばかり多くて、手を出しすぎたから、結局何も出来ず、おせいけれど、今からひとつに絞って、やり直しです。このごろは世間がはげしく変わるでしょ。私なんかついて行けず、わからないことばかり。このままご一緒していたら、ひと様の迷惑になる。僻んでいるのところがいます。これからは古い頭でもわかる、時がたっても変らないものと取っ組んでみたいわけ」「何です、それは」「語学と歴史、どうせ仕上りはしない、遊びですよ。だけど、古きはよしと言い、きっと本当のことが山程あるでしょう。」

38 朝日社会福祉賞

▽この正月はまさに賞月で、朝日賞受賞のおかげで忙殺された。とくに、祝いの電報や手紙などが机上に堆くつまれ、その礼状書きに追われたからであった。実はその山がいまだに片付かない。

▽電報というものは片仮名ばかりで簡素なわりに丁重な感じを、つける。その代り、失礼な言い方だが、いまは電話で打てるから手間はかからず、お互いに手っ取り早い。これが現代的と言うのだろう。だけれど、そのお札となると楷書で封筒とあらたまらざるをえない。同文の印刷という手も知っているが、それで気が済まないのは、野暮な明治調というべきか。祝ってもらって、忙しいなど不平をいうのもおかしい話だが、つい。

▽朝日賞は他の新聞社のより権威があると聞いた。それは形式の問題ではないが、たった2名の受賞者のために、社のおえら方が威儀を正して式に臨み、その上、結構なご馳走まで頂くのだから恐縮千

万であった。

▽社会の^{ほくたく}木鐸と言われる新聞の使命と責任とを考えると、社としては当然と考えるのだろうが、受賞者としては光栄過剰を感じる。事業となれば、たったひとりの人間の功績ではなく、個人は事業の代表者にすぎず、これを陰で支えた多くの協力者の存在によったことを、もっと明瞭に打ち出す手はないものか。

▽それはそれとして、マスコミの伝播力の大きさに、いまさらのように驚いた。発行部数が多い上に、日本の津々浦々まで行きわたり、目にとめる人の多いことは想像できるが、読んだ途端に黙っておられず、すぐペンをとる人、純情というのか、感激家というのか、それも未知も未知、始めての人に手紙を書く方がすくなくないのだから、こちらも感激したわけだ。3、40年も音信のなかった旧知からの久しぶりのたよりも嬉しかったが、小学生、障害をもつ人、悩みを抱えている人からの祝いや訴えは、とくに胸を打った。

▽問題を訴えてきた人にはすぐ一応の返事をできるだけ早く書いたが、私なら障害者の就職を斡旋できると思う人、交通事故で片眼失明し途方にくれている人、さては、看護婦になりたいが入学試験におちたという身の上相談までいろいろある。

▽私の手に負えない問題は打ち切らざるを得ないが、これらは氷山の一角であって、訴える勇気ある一人の陰に十や百のケースが聴いてもらう手段もなく、ひとり苦しんでいる多数者の存在こそ重く、そこに眼を向けねばなるまい。それを思うと、賞月は忙しかったなどとぼやいたりするのは気が知れない。もっと大局に目を留めねばなるまい。新聞社は受賞を利用して、読者の目をもっと社会の実情に向けさせる。そこに新聞としての大事な使命があることを考えているだろう。ある人が何をしたかと褒めたところで、個人の名誉なんてものは人の噂にのぼるにしても、75日がせいぜいだろう。ほまれを好むのは人の常だが、「わたしは人からの賞を受けることをしない」と言った人もあり、それこそが人間としては本当の生き方と考えたい。

▽朝日賞受賞で感じた一端を、ありのまま並べました。東コロの方からもいろいろ祝って頂き、機会あるごとにお礼申しましたが、洩れた方もありましたろう。たびたび申すように、受賞はひとえに皆さんのおかげで、私の労は長居しただけでした。紙上をかりて、もう一度ありがとうを言わせて下さい。

39 釜ヶ崎をうろつく

▽京都府下にあるゼンコロの仲間梅花園の創立20周年式典に祝意を表するため西下したついでに、暇をぬすんで、西の山谷こと、大阪のスラム釜ヶ崎を3時間あまりうろついた。案内してくれたのは、この道そこで8年、困っている人たちの世話をしつづけている保健婦さん、厳寒の夜半でもなければほんとの釜ヶ崎は見られなくはないのか、と質したが、どうしてどうしての返事であった。

▽ずっと以前、山谷を訪ねた時は、ひとり歩きはあぶないとおどかさされたが、いまここは、そんな空気が感じられない。10年ほど前からいくたびか騒ぎがあったが、いまは街の真中に西成署がデンと建って、パトロールもとくに多いそうだ。100メートル四方の狭く限られた地域に、日雇労働者相手の簡易宿泊所が立ち並ぶ。むかしは寝台列車のように二段ベッドで、宿らしくなかったからか、逆

さにドヤとかドヤ街と称したがいまは堂々〇〇ホテルの看板で、大きく一泊1000円、1200円、1500と等級が貼りだしてある。きけば、いずれも個室で炊事もできるよし、変ったものだ。

▽トラックで労働者を狩り出しに来る人間の市場は早朝でないと見られずその場所はガランとしていたが、仕事にありつけなかった連中が街にあふれていた。ま昼間からあちこちで青爛（屋外で着のみ着のまま爛徳利のごろ寝すること—広辞苑—）をきめこんでいる人がいる一方、立ちならぶ屋台の前で飲み食いしながら上機嫌でしゃべっている。「毎日用もないのに、なんでこんなところろついているんか!」と保健婦さんに絡んでくる酒臭い男とは「しばらくねえ、元気?」とふたことみこと交わして、「では、元気でね!」とさりげなく別れる。私を大阪見物に田舎から出てきたおやじと思っただけか、手にしたせんぺい袋をさし出す人もいた。保健婦さんが「元気っ!」と声をかけると「仕事がないんだ」がきまった返事、それでもくったくなくさそうに歩いている。こんな連中で街は人一杯の感じだ。道端に古着屋が何軒も並び、女ものもぶら下っている。

▽5時、小さな広場にさしかかると長い人の列が延々と狭い道路までのび、一時間も前から並んでいるという。広場は紙屑がいっぱいの公園で、その中央、一列の先端にはドラム缶のような大きな鍋が二つおかれ、日雇労働者の労組事務所が、毎夕雑炊の無料サービスをしているのだった。味噌粥に菜っ葉が少し、そのひと碗を列の先頭から箸と一緒に順々に貰うとじべたに腰をおろして満足そう、腹一杯の分量でもあるまいに、毎日500人ほどが並ぶという。列の長さで盛り方を加減する。働けない日は、一日これだけで済みますのか、呉れるものなら何でもござれと腹の足しに食べるのか、いずれにしてもこの光景は考えさせられる。いまや飽食日本・食い道楽大阪、その片隅のこの現象は何を語るのか。バングラデシュで働く友人からは日本のGNPの一人当たりが2万ドル弱、バングラデシュは140ドルと言ってきた。第三世界の飢餓と釜ヶ崎とは同日の談ではないが、ここにも同じ責めを感じないわけにいかない。

経済のからくりは私などよくわからないが、日本が経済大国になったのは、日本人が勤勉だからと得意になってはいられない。朝鮮とベトナム、二度の戦争特需であっさり軍国主義に早替りした政治の責任に対し、満ち足りた日々の生活で目が眩んではいけない!

(1980~87年)